

太斎館跡 発掘調査報告書

県営ほ場整備事業（太斎地区）に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ

2011

新発田市教育委員会

例　　言

1. 本報告書は、新潟県新発田市太齋字館ノ腰 122 番地ほかに所在する太齋館跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、県営ほ場整備事業（太齋地区）に伴うものである。新潟県新発田地域振興局の委託を受け、新発田市教育委員会が主体となって、平成 21 年 5 月 25 日から 7 月 24 日に現地調査を、発掘調査終了後から平成 23 年 3 月まで整理作業を実施し報告書を作成した。
3. 現地の発掘調査から報告書刊行に至るまでの経費は、総額の 90% を新潟県新発田地域振興局が、直接農家の負担分である総額の 10% はその半額を国庫補助、残りを県と市がそれぞれ負担した。
4. 報告書作成作業は、津田憲司を中心に実施し、これを整理作業員が補助した。
5. 本書の執筆および編集は津田が行った。
6. 本書掲載の写真は、田中耕作が撮影した。
7. 調査の記録および出土遺物は、新発田市教育委員会が保管している。遺物の注記は、遺跡名を「太ヤ」と略記し、以下「遺物番号・出土グリッド・遺構・層位・日付」を記した。
8. 本書の作成にあたって、遺物については水澤幸一氏（胎内市教育委員会）にご教示を頂いた。また下記の諸氏・機関から多くのご協力・ご支援を賜った。記して感謝の意を表する。（五十音順 敬称略）
阿部洋輔 伊藤喜代子 伊藤啓雄 小林 弘 鈴木秋彦 関 雅之 高橋春栄 増子正三 四柳嘉章
新潟県新発田地域振興局農村整備部 豊浦郷土地改良区

凡　　例

1. 本書に掲載した地形図は、国土地理院発行の 1/50,000 「新発田」（平成 15 年）、1/25,000 「新発田」（平成 22 年）、1/25,000 「天王」（平成 14 年）、および豊浦郷土地改良区作成の 1/1,000 「太齋地区地形図」を縮小したものである。
2. 本書に掲載した平面図の方位は、第 1・2・29 図は天を真北とし、それ以外は方位記号の方向を磁北とする。なお、磁北は真北から西偏 7°50' である。
3. 採図の縮尺は、遺構 1/40~1/100、遺物 1/3 を基本とし、適宜スケールと縮尺を示した。
4. 遺構実測図は、破線が未完掘の範囲を、「K」が擾乱を示す。
5. 土層説明での土色は、小山正忠・竹原秀雄 2008 『新版 標準土色帖』日本色研事業株式会社を使用した。
6. 遺物は、遺構単位に掲載し、採図・図版ともに同一の番号を付した。なお、図版については、採図番号も付している。
7. 遺物実測図は、一点破線が陶磁器の施釉範囲、実線がヘラケズリを示している。拓影は、断面左側に内面、右側に外面を置くことを基本としているが、擂鉢・片口鉢については逆としている。
8. 遺物観察表の数値は、() が復元値、< > が残存値を表し、計測不能なものは空欄とした。
9. 引用・参考文献は、卷末に一括し、本文中では著者名と発行年を括弧書きとした。

本文目次

例言・凡例

本文目次

挿図目次

図版目次

第Ⅰ章 遺跡の位置と調査経過

1 遺跡の位置と立地	1
2 調査に至る経緯と調査体制	2
3 調査の方法と経過	5

第Ⅱ章 遺構と遺物

1 南区	8
2 東区	12
3 北区	17
4 西区	20
5 遺構外・攪乱出土遺物	22

第Ⅲ章 まとめ

引用・参考文献	27
遺物観察表	28
報告書抄録	奥付け

挿図目次

第 1 図 遺跡の位置	1	第 16 図 3号溝実測図	16
第 2 図 試掘・確認調査トレーンチ配置図	3	第 17 図 2号土坑実測図および出土遺物	16
第 3 図 太斎館跡土地更正図	3	第 18 図 北区 遺構配置図	18
第 4 図 試掘・確認調査出土遺物	4	第 19 図 北区 郭・東堀実測図および出土遺物	
第 5 図 調査区の位置とグリッド設定図	6		18
第 6 図 遺構配置図	7	第 20 図 北区 北堀実測図	19
第 7 図 南区 遺構配置図	9	第 21 図 西区 遺構配置図	20-21
第 8 図 南区 西堀実測図および出土遺物	9	第 22 図 西区 北・西堀実測図	20-21
第 9 図 南区 南堀実測図	10	第 23 図 西区 北堀出土遺物	21
第 10 図 1・2号溝実測図および出土遺物	11	第 24 図 西区 西堀出土遺物	21
第 11 図 1号土坑実測図	12	第 25 図 1～3号小ピット実測図	22
第 12 図 東区 遺構配置図	13	第 26 図 遺構外・攪乱出土遺物(1)	23
第 13 図 東区 郭実測図	13	第 27 図 遺構外・攪乱出土遺物(2)	24
第 14 図 東区 南堀実測図	14	第 28 図 太斎館跡推定範囲	25
第 15 図 東区 東堀実測図および出土遺物	15	第 29 図 周辺の城館跡	26

図版目次

図版 1 南区	
図版 2 東区	
図版 3 北区, 西区	
図版 4 出土遺物(1)：青磁, 白磁, 古瀬戸, 越前	
図版 5 南区：西堀, 東区：南堀・郭, 北区：北堀, 西区：西堀, 2・3号溝, 1・2号土坑	
図版 6 出土遺物(2)：試掘・確認調査, 南区, 東区, 北区, 西区	
図版 7 出土遺物(3)：西区, 遺構外・攪乱	

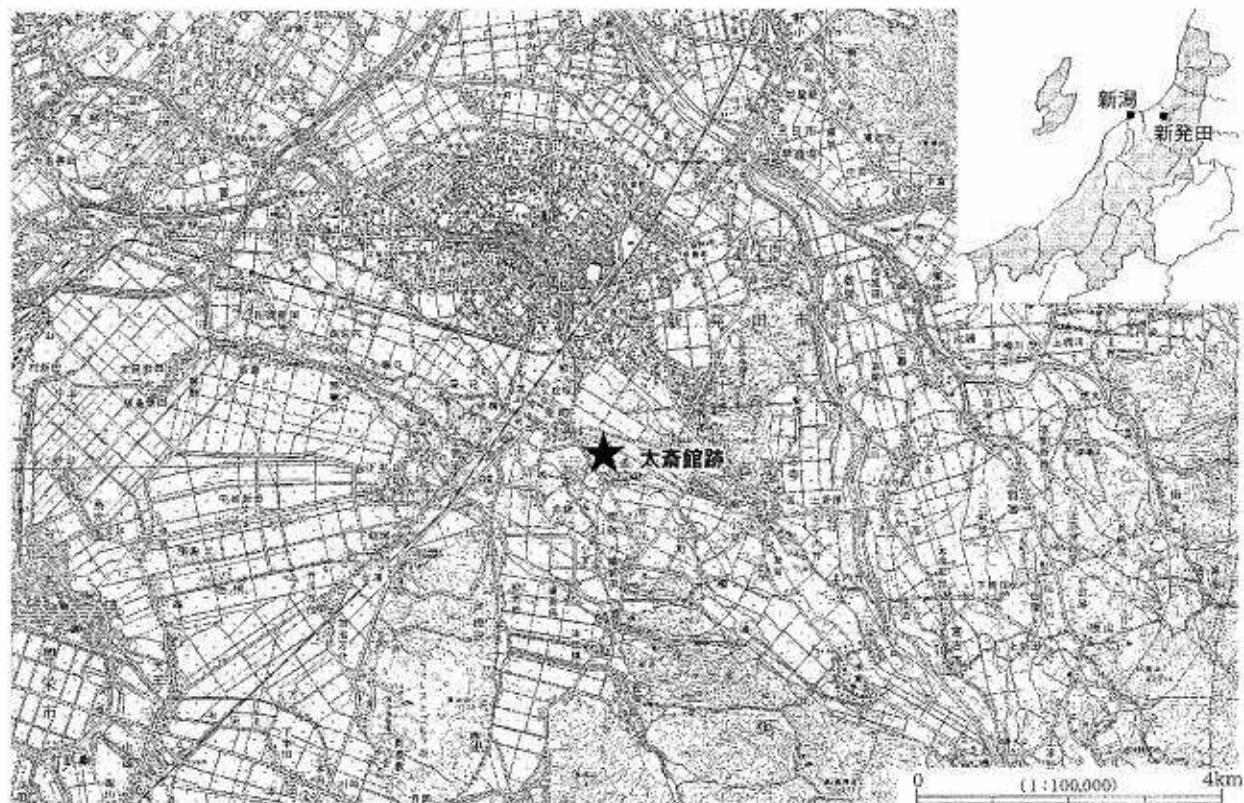
第Ⅰ章 遺跡の位置と調査経過

1 遺跡の位置と立地

新発田市は、新潟県の北部、新潟市の東に隣接する地方都市である。平成15年7月に北蒲原郡豊浦町と、平成17年5月に同郡紫雲寺町・加治川村と合併し、西は日本海に面した藤塚浜から、東は山形県との県境をなす飯豊連峰にわたる広大な市域を形成している。現在の人口は約10万3千人、総面積は532.82km²である。住宅・商業域が集中する市街地は、旧新発田藩城下町とその周辺に発達し、周囲には農村地帯が広がっている。

市域の地勢を概略すると、新潟平野の一部をなす平野部と、その東縁部の五十公野丘陵、その南方の五頭連峰・櫛形山脈からなる地域である。平野部は、東側の山地から流れてくる加治川・姫田川・坂井川などの河川の作用によって形成された扇状地・自然堤防と、海岸線に平行な砂丘列のある海岸平野、および潟湖の干拓地などによって構成されている（国土地理院 1993）。

太斎館跡は、新発田市太斎字館ノ腰122番地ほかに所在する。市街地の南、加治川が形成した扇状地に立地し、標高は約15mである。北には佐々木川、南には天辻川がそれぞれ西流する。現在、館跡の周囲は水田および畑地となっており、約150m離れた西側には国道290号線が走っている。館跡の一角には、神明社が建てられており、その境内の片隅には、石仏が1体（「太斎神明宮石仏」）置かれている。出湯系の阿弥陀仏で、中世の所産である。周辺には、同じ中世の遺跡として、国道290号線を挟んで西側に、集落跡である太斎金塚遺跡があり、また太斎集落内には、五輪塔（「太斎公民館石塔群」）が現在も残っている。



第1図 遺跡の位置

2 調査に至る経緯と調査体制

平成 13 年度に県営担い手育成基盤整備事業として、太斎地区（計画面積 90.4ha）が採択された。これを受け、新潟県新発田農地事務所（以下、県農地。平成 16 年度から新潟県新発田地域振興局農村整備部）と豊浦町教育委員会（以下、町教委）との間で協議が行われ、平成 14 年度に試掘調査を実施した。その結果、計画面積地内に、中世の居館である太斎館跡と、古墳時代の遺物包含地である太斎遺跡が存在することが明らかとなった。その後、平成 15 年 7 月に豊浦町は新発田市と合併したため、事業は、町教委から新発田市教育委員会（以下、市教委）へと引き継がれた。同年 8 月に県農地、豊浦郷土地改良区（以下、豊浦土改）、市農林課の関係各機関と市教委との間で、遺跡の取扱いについて協議を行った。続いて同年 11 月に、市教委は、明治時代の土地更正図の区割りを参考に、検土杖を用いたボーリング探査を行い、館跡について概ねの範囲を確認した。翌 12 月には再び協議を行い、遺跡の広がりや土層の堆積状況を把握するために確認調査が必要であることを確認し、県農地が平成 18・19 年度に同地区で実施を予定していた工事計画については見直すこととした。その後、平成 18 年 6 月に新潟県新発田地域振興局農村整備部（以下、県振興局）から太斎館跡・太斎遺跡の確認調査要望が提示され、翌 19 年度に調査を実施することで合意した。

確認調査は、平成 19 年 11 月 5 日～12 月 12 日に実施した。幅 1.6m、長さ 3.0～6.5m の試掘坑（トレンチ）を、太斎館跡については 19 箇所（1～13・16・17・23～26 号トレンチ）、太斎遺跡については 7 箇所（14・15・18～22 号トレンチ）設定・掘削し、それぞれの遺跡の広がりの把握を行った（第 2 図）。その結果、前者では、現地表面から 20～50 cm の深さで館の堀を検出し、堀底までの深さは 1.5m 以上であることが確認できた。後者では、21 号トレンチで古墳時代の遺物包含層を、22 号トレンチでは包含層に相当する土層の堆積を、それぞれ現地表面から 60 cm の深さで検出した。なお、本報告書では、確認調査で出土した遺物について、平成 14 年度の試掘調査出土のものとあわせて、一部を掲載した（第 4 図）。いずれも太斎遺跡から出土した土師器で、遺存状態はかなり良好である。古墳時代後期に該当する。

この調査結果をもとに、平成 20 年 1 月に県振興局、豊浦土改と市教委で再び協議を行ったところ、面工事範囲については盛土施工とすることで遺跡の保存を図ることに決定した。しかし、農道予定地については、その下に用排水管を 2 本ずつ埋設するため幅広の掘削は避けられないとのことであり、また計画位置の変更は難しいとのことであった。予定地は、その一部が太斎館跡に含まれていることから、引き続き調整を行い、同 21 年度に本調査を実施することで合意した。

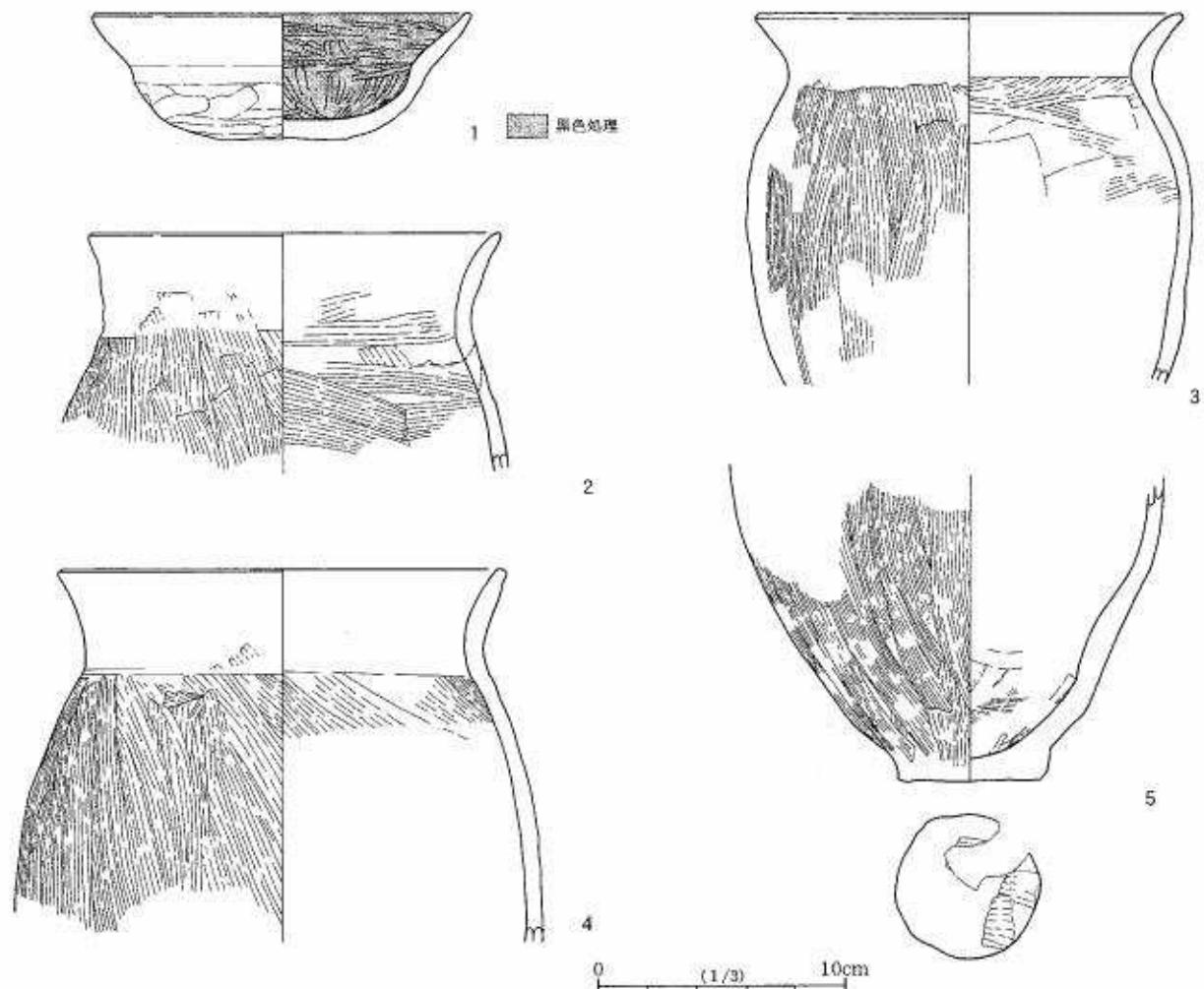
以上の協議結果を踏まえて、事業主体者である県振興局は、文化財保護法第 94 条第 1 項に則り、平成 21 年 4 月 10 日付け芝振農整第 30 号で、新潟県教育委員会教育長（以下、県教育長）宛て「埋蔵文化財発掘の通知について」の文書を新発田市教育委員会教育長（以下、市教育長）に提出。これを受けて市教育長は、同年 4 月 16 日付け生学第 115 号「埋蔵文化財発掘の通知について（進達）」を県教育長に進達した。県教育長は、同年 5 月 1 日付け教文第 95 号「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）」によって、工事着手前の発掘調査実施の通知を出した。同年 5 月 8 日には、県振興局長と新発田市長との間で、発掘調査の実施委託について契約を締結。市教育長は、同年 5 月 21 日付け生学第 470 号で、文化財保護法第 99 条第 1 項による「埋蔵文化財発掘調査の報告について」を県教育長に提出した。その後、市教委が 5 月 25 日から現地調査に入った。なお、調査費用の分担については、例言に記載したとおりである。



第2図 試掘・確認調査トレンチ配置図



第3図 太齋館跡土地更正図



第4図 試掘・確認調査出土遺物

調査体制

平成 19 年度（確認調査）

調査主体 新発田市教育委員会（教育長 大滝 昇）

監 理 高澤誠太郎（教育部長）

総 括 杉本 茂樹（生涯学習課長）

田中 耕作（生涯学習課参事）

調査担当 鶴巻 康志（生涯学習課埋蔵文化財係長）

調査員 坂野井絵里（生涯学習課臨時職員）

事務局 安達 悅司（生涯学習課主事）

平成 21 年度（本発掘調査）

調査主体 新発田市教育委員会（教育長 大滝 昇）

監 理 土田 雅穂（教育部長）

総 括 杉本 茂樹（生涯学習課長）

調査担当 津田 憲司（生涯学習課文化財技師）

調査員 田中 耕作（生涯学習課参事）

事務局 渡邊美穂子（生涯学習課主任）

平成 22 年度（整理作業・報告書作成）

調査主体 新発田市教育委員会（教育長 大滝 昇～11月30日、塙野 純一 12月24日～）

監 理 土田 雅穂（教育部長）

総 括 杉本 茂樹（生涯学習課長）

調査担当 津田 憲司（生涯学習課文化財技師）

調査員 田中 耕作（生涯学習課参事）

事務局 渡邊美穂子（生涯学習課主任）

本田 祐二（生涯学習課文化財技師）

3 調査の方法と経過

調査区の設定と調査方法（第5図）

調査区は、調査対象地点を便宜上4箇所に区切り、それぞれを「北区」・「南区」・「東区」・「西区」と呼称した。グリッドについては、用排水管の埋設工事にともなう測量杭を基点として設定した。一边10m四方の方眼を大グリッドとし、さらに大グリッドを東西・南北に五等分した2m方眼を小グリッドとした。大グリッドは、西から東へ「A」・「B」…、北から南へ「a」・「b」…とし、その組み合わせで「Aa」・「Bb」…と呼称し、小グリッドは、西から東、北から南へそれぞれ「1」・「2」…とし、北西から「Aa1-1」・「Bb5-5」のように呼称した。

今回検出が想定される堀は、確認調査の結果、その深さが1.5mを越えることが明らかとなっていた。そこで、調査方法は、安全性を考慮して、① 挖削の際は、調査区の壁際を深さ50cmごとに、幅50cmの階段状に掘り残していく、壁の崩落を防止する。② 挖削する深さは、工事の掘削予定深度を目安にすることとし、堀底は、土層観察の際に、部分的に検出する。③ 挖削は、堀の掘り込み斜面および土層観察用に設定するベルト付近は人力で行い、それ以外の範囲はバックホウで薄く慎重に掘り下げ遺物の検出に努めることとした。

基本層序

擾乱などの影響が及んでいない調査区の壁を選んで、土層の観察を行った。観察地点は、北・東・西区ではそれぞれ1箇所（①～③地点）、南区では2箇所（④・⑤地点）である。

土層は、表土を含めてI～VI層に分けた。I層は耕土で、a・bの2層に分けられる。III層の暗灰黄色砂質土～黒褐色土は、中世および近世の遺物を包含し、遺跡のほぼ全域に堆積している。VI層は地山で、a・bの2層が認められた。なお、II・IV層は南区で、V層は西区で、いずれも部分的に堆積が確認できた層である。遺構については、VI層の上面で検出した。

現地調査の経過（日誌抄）

5月25～6月3日 ユニットハウス・トイレの設備および発掘器材を搬入。27日から南区の発掘調査に着手する。基準杭をもとにグリッドと調査区を設定した後、バックホウで表土を掘削する。その後、人力による遺構確認を行い、堀、溝、土坑を検出、引き続き各遺構の調査に入った。レベル原点移動は調査の合間を見計らって行った。

6月4～17日 南区と並行して東区の調査に着手する。バックホウでの表土掘削後、人力による遺構確認を行い、堀と郭、溝、土坑を検出した。南区の堀の調査終了を受け、10日から人力による本格的な遺構の掘削・調査に入る。

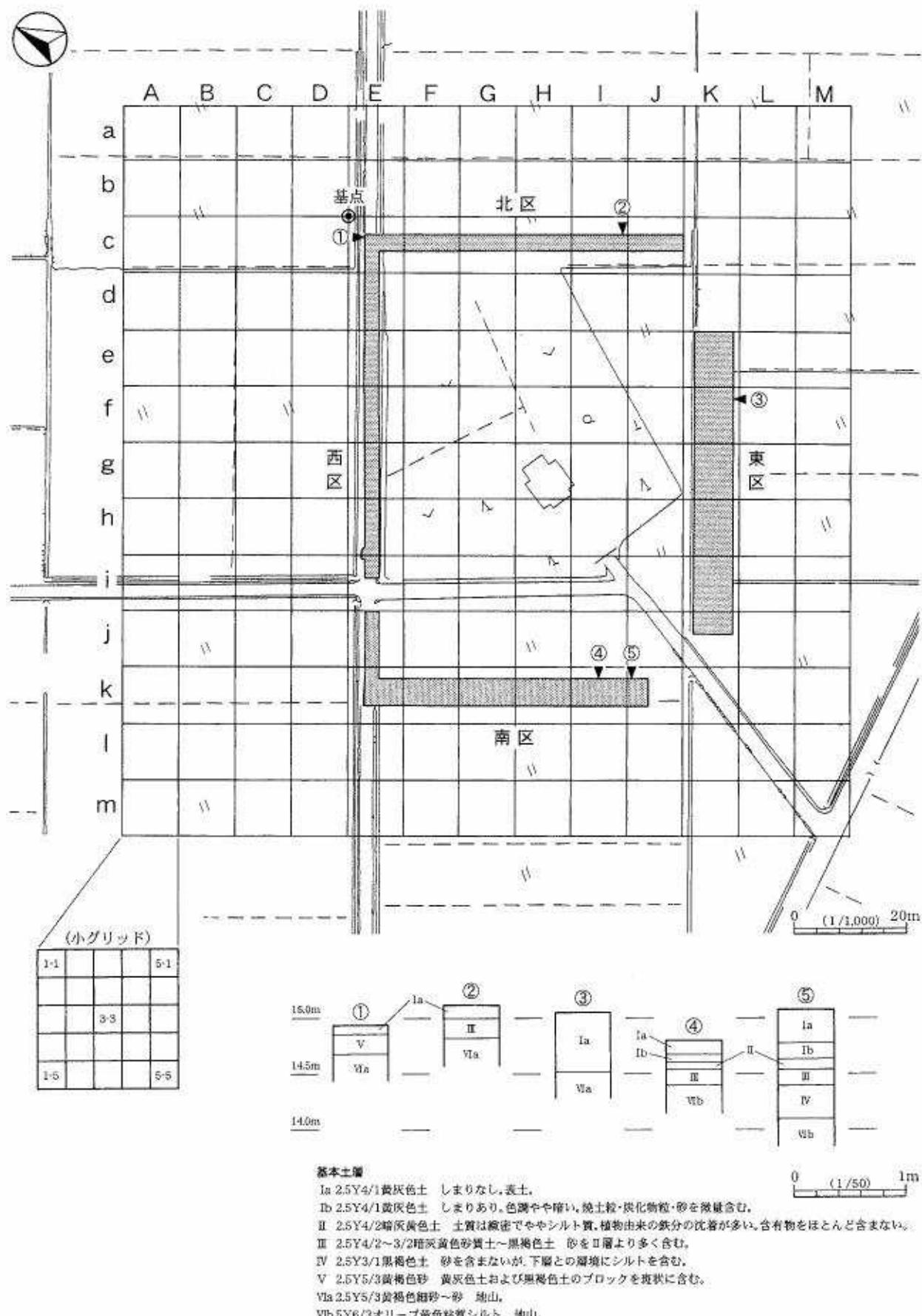
6月22～25日 北区の調査に着手する。バックホウでの表土掘削後、遺構確認を行い、堀と郭を検出す。東区

の堀と郭の掘削が終わるのを待って、人力による遺構調査に入る。24日に南区の調査が完了。

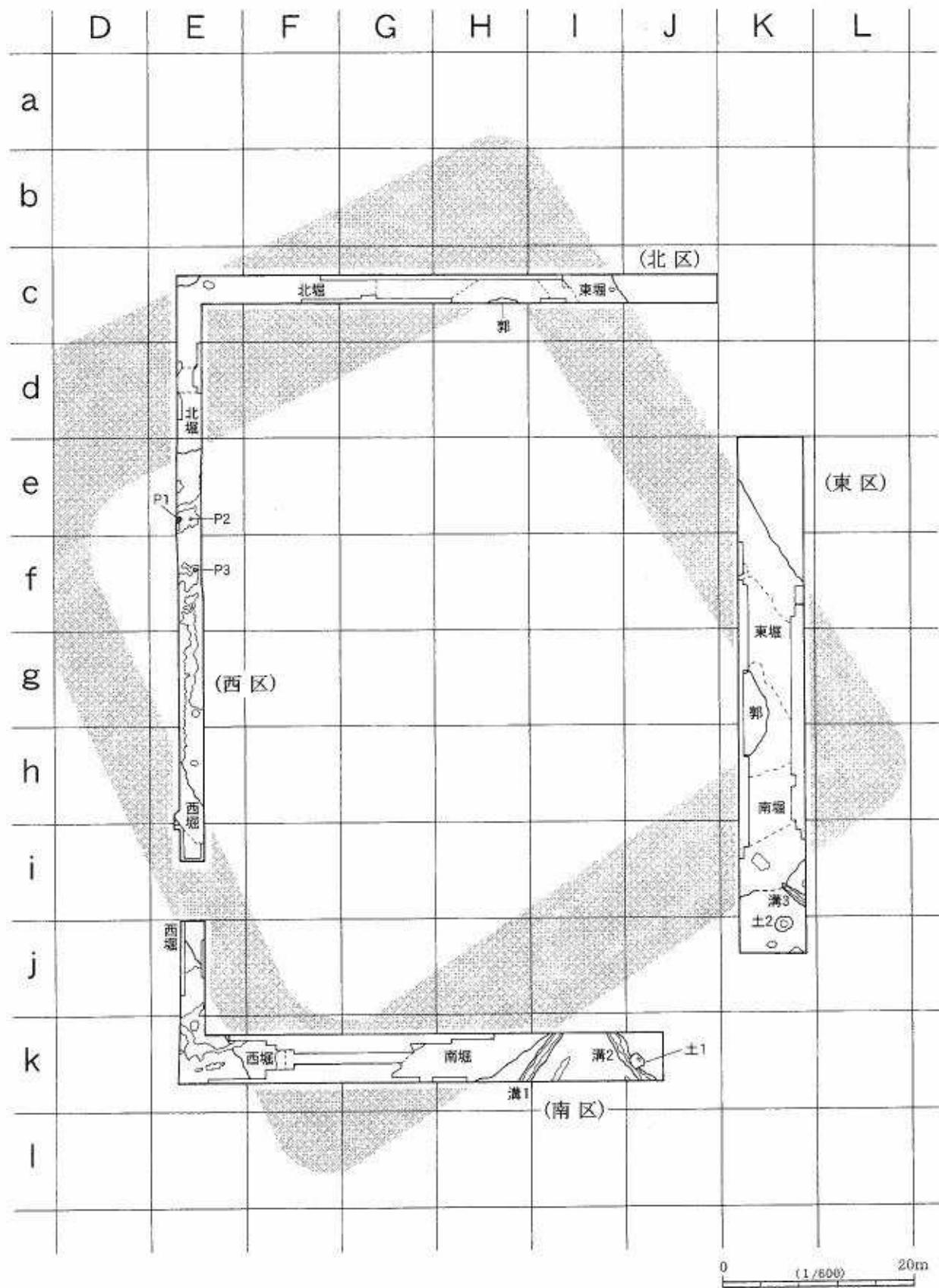
6月26～7月24日 西区の調査に着手する。バックホウで表土を掘削した後、遺構確認を行い、堀と郭内から小ピットを検出した。7月3日に東区、7日に北区の調査が完了し、1週間程の雨天による中断を挟んで14日から本格的に堀の調査に入る。22日に完掘写真を撮影し、23日に図面作成が終了、発掘器材を搬出する。24日に図面の補足とバックホウによる調査区の部分的な埋め戻しを行う。その後、ユニットハウス・トイレの設備を搬出して、現場調査を終了した。なお、4日には地元市民に対して現地説明会を開催した。

整理作業

発掘作業終了後の8月から作業を開始した。平成21年度は、現場で作成・撮影した遺構実測図や写真の整理、および出土遺物の水洗・注記といった基礎的な整理作業を行った後、遺物については、接合・復元作業を行った。平成22年度は本格的な整理作業に着手する。報告書掲載遺物の選び出し・実測、遺構・遺物図面のトレース、遺物写真の撮影を行った。併せて、図版版下の作成、原稿執筆を行い、報告書を印刷・刊行した。



第5図 調査区の位置とグリッド設定図



第6図 遺構配置図

第Ⅱ章 遺構と遺物

今回調査を行った4つの調査区のうち、西区では近世以降の擾乱が広い範囲に及んでいたが、それ以外の区では比較的良好な状態で遺構を検出することができた。検出した遺構は、館を構成する堀と郭の一部、溝3条、土坑2基、小ピット3基である。出土した遺物の量は平箱約1箱分で、遺物包含層（Ⅲ層）出土のものを除けば、その多くが堀からの出土であった。以下、調査を行った順番に従って、調査区ごとに記述していくこととする。また、個々の遺物の詳しい観察内容については、本文の最後に一覧表にしてまとめて記載した。

1 南 区

Ek4-2～Jk2-4 グリッドに位置する（第7図）。調査区の規模は、幅5m、長さ48mで、現地表面から40cmほど の深さで遺構確認面となる。検出した遺構は、堀、溝2条、土坑1基である。堀は、地山のVIb層の下の砂層まで掘り込まれている。土地更正図から、館の西隅部付近に該当すると推定される。

西 堀（第8図）

調査区の西部、Ek4-2～Fk1-4 グリッドにおいて、郭の西側を巡る堀の掘り込み際、いわゆる肩部を検出した。館の外側にあたる。反対側にあたる郭側の肩部については、調査区外のため検出できていない。確認できた堀の規模は、幅が4.6m、確認面から底面までの深さは1.4mである。肩部から幅1.1～1.5mにかけては、かなり緩やかに、その先は、比較的急な傾斜で底面まで掘り込む。なお、Pk2-2 グリッド付近では、緩やかな掘り込みの先に幅1.5mのテラス面が認められた。底面は平坦で、水が浸み出した。

遺物は、黒褐色砂質土（南堀の4a層に相当）から越前の甕（1）と、オリーブ黒色粘土（同8層に相当）から珠洲の片口鉢（2）が出土している。

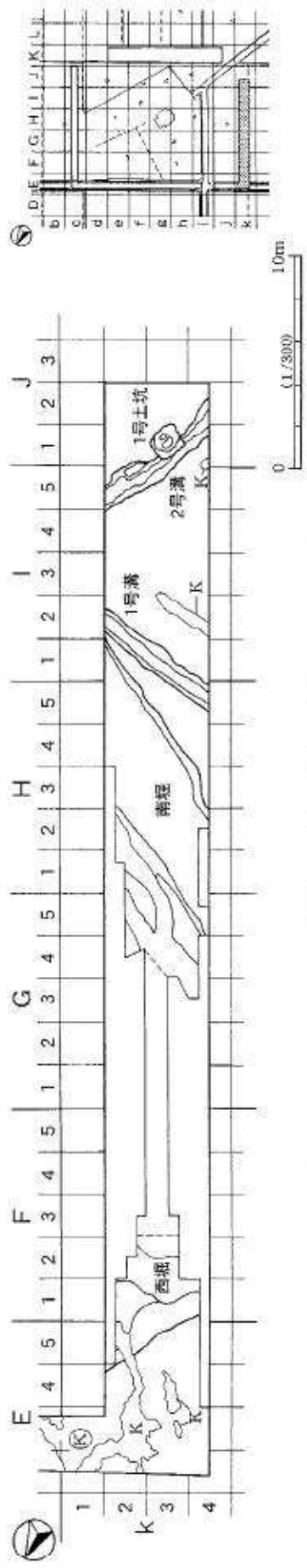
南 堀（第9図）

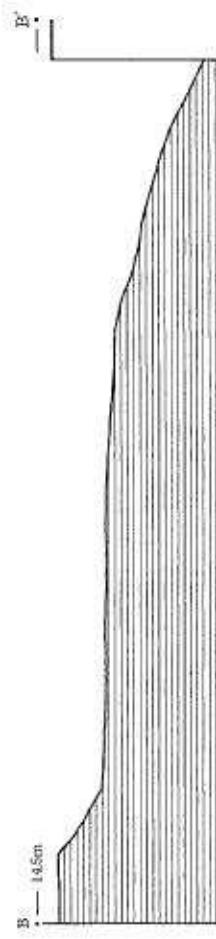
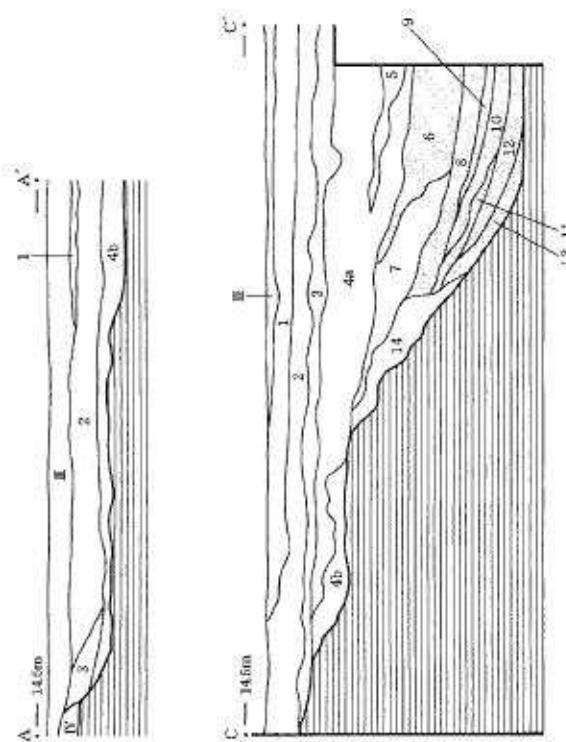
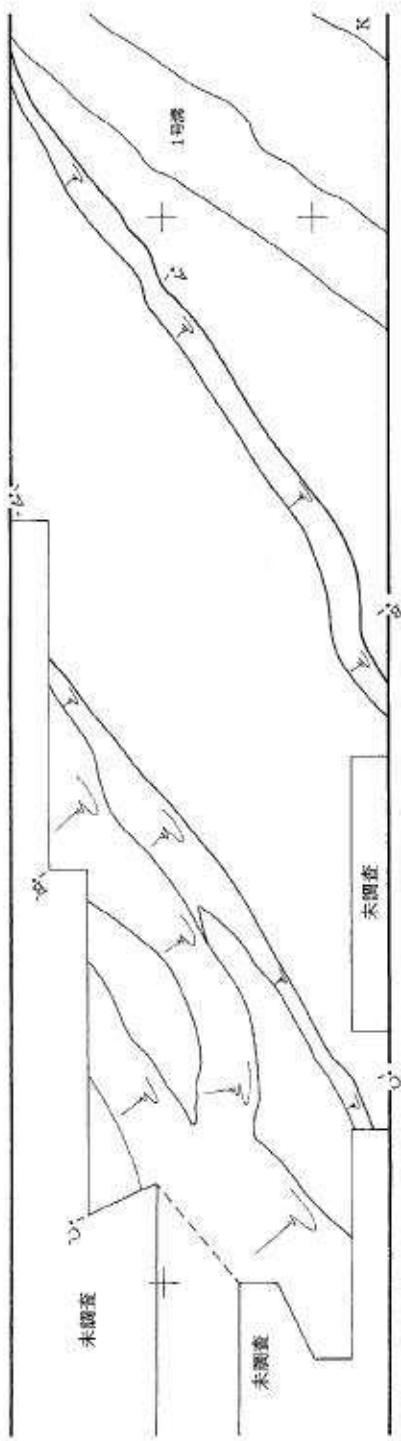
調査区の中央部やや東、Hk2-4～Ik1-2 グリッドにおいて、郭の南側を巡る堀の掘り込み際を検出した。館外側の肩部にあたる。西堀と同様、郭側の肩部は検出できていない。確認できた規模は、幅が5.1m、確認面から底面までの深さが1.7mで、二段に掘り込んでいる。一段目は、確認面から20cmほどの深さまで掘り込み、幅3.0mのテラス面となる。二段目は、テラス面から1.4mの深さまで急な傾斜で掘り込み、底面に至る。斜面の途中には、幅0.8～1.2mほどのテラス面が部分的に認められる。底面は平坦で、西堀と同じく水が浸み出した。埋土は15層に分けられる。薄く堆積している粘土（8～13層）は水成堆積で、堀が機能していた時期に自然堆積したものと推測される。また、6層も堀の帶水を示す水成堆積である。黒褐色砂質土（4a～5層）は、その堆積状況などから、短期間での埋め戻しによるものと考えられる。遺物は、二段目の掘り込みのテラスから古瀬戸の瓶子が1点だけ出土したが、小片のため図化していない。

1・2号溝（第10図）

1号溝は、Hk5-4～Ik2-2 グリッドに位置し、南堀の東側を東西方向に延びる。幅は1.0～1.2m、確認面からの深さは20～35cm、底面はほぼ平坦で、断面はU字形である。出土遺物はなく、詳細な時期は不明である。

2号溝は、Ik5-2～Jk2-4 グリッドに位置する。南西から北東方向に延びており、そのまま延長すると、南堀と直交する。幅は1.0～1.4m、確認面からの深さは20～30cm、底面はほぼ平坦である。埋土は4層に分けられ、1層の黒褐色土から珠洲の片口鉢（1）が出土している。本遺構の時期は、出土遺物から15世紀と考えられる。

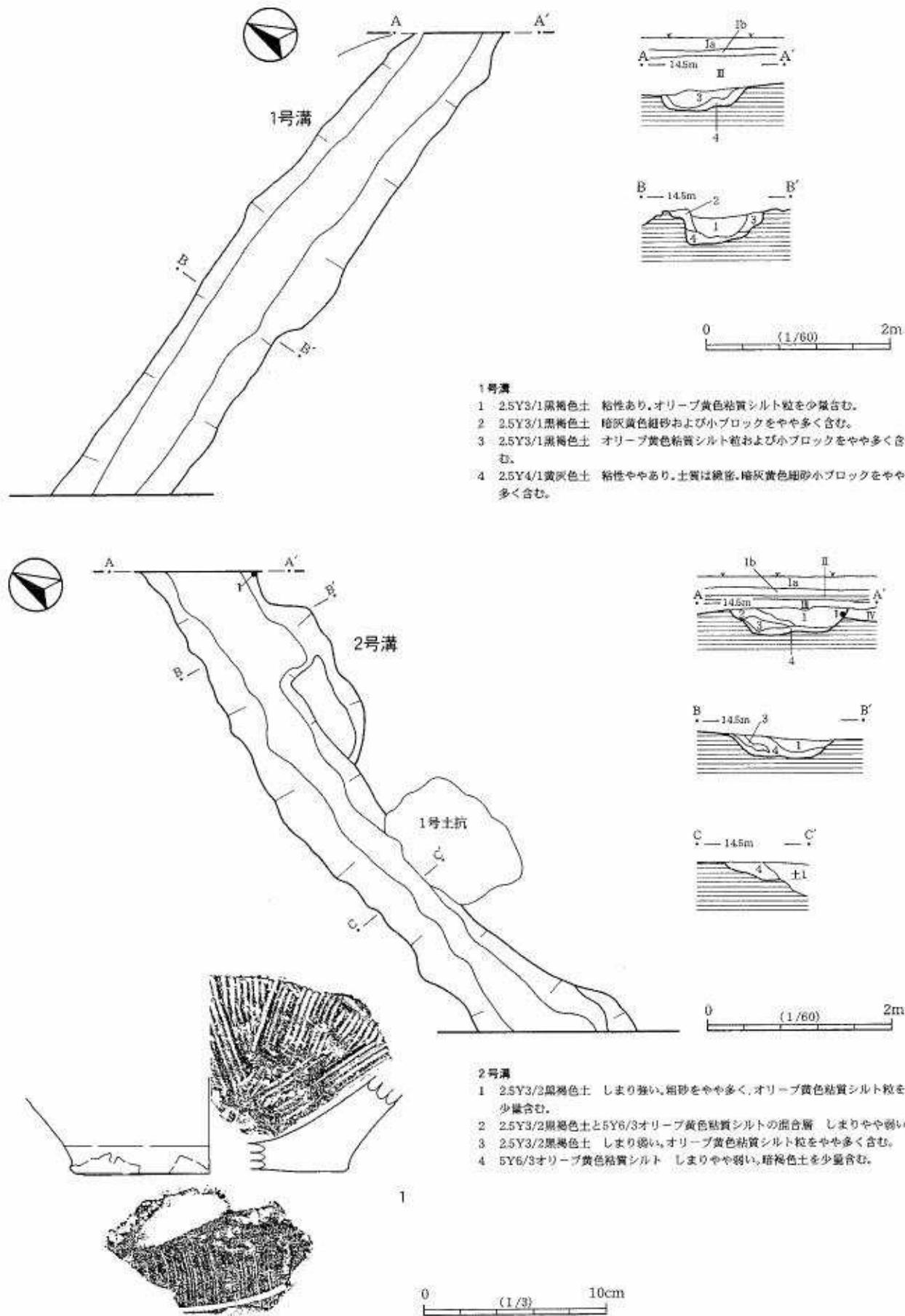




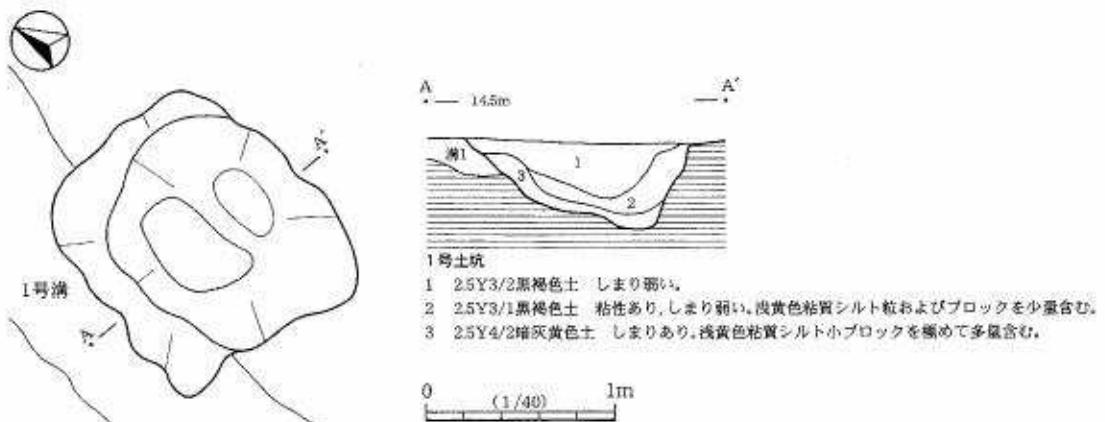
南区 調査
1 SY6/3オリーブ黃色シルトと細砂の混合層 しまり強い、黒褐色土小ブロックを含む。
2 2SY3/1黒褐色粘土 粘性強く、しまり弱い、灰褐色長石粘土を含む。
3 2SY3/2黒褐色粘土 粘性強く、しまりややあり、オリーブ褐色シルト小ブロックを少量含む。
4a 2SY3/2黒褐色粘土 粘性あり、しまりやや弱い。色調はやや暗い。下部はごく薄い。含有物はほとんど含まない。
4b 2SY3/2黒褐色粘土 オリーブ褐色シルトが混じる。オリーブ褐色シルトブロックを含む。
5 黑褐色砂質土(4a層)と2SY5/2暗灰黄色砂の混合層 しまりあり。
6 5SY1灰色シルト質粘土 オリーブ灰粘土・灰オリーブ色粘質シルトを粗く含む。
7 2SY3/2黒褐色砂質土 灰オリーブ色粘質シルトブロックを少量含む。
8 SY3/1オリーブ黒色粘土 しまり弱い。色調はオリーブ味が強くやや明るい。部分的にシルト質となる。
9 5SY2/1黑色シルト質粘土 しまり弱い。灰化材を多く含む。
10 5SY3/1オリーブ黒色粘土 しまり弱い。色調は8番よりやや明るい。灰面相はシルト質となる。
11 SY4/1灰色シルト質粘土 しまり弱い。
12 SY3/1オリーブ黒色粘土 しまり弱い。色調はオリーブ味がやや強い。10層に鉛山。
13 SY2/1黑色シルト質粘土 しまり弱い。青灰色粘土を少量含む。
14 2SY3/2黒褐色砂質土 色調は暗い。地山の底灰黄色砂を層状に含む。

断面図:0 (1/50) 1m
平面図:0 (1/100) 2m

第9図 南区 南堀実測図



第10図 1・2号溝実測図および出土遺物



第11図 1号土坑実測図

1号土坑（第11図）

調査区の東部、Jk1-3 グリッドに位置し、2号溝の一部を壊して掘り込んでいる。平面形は隅丸の長方形で、長軸 1.4m、短軸 1.2m、底面は東側が深く、確認面からの深さは 45 cm である。壁は上方に開きながら立ち上がる。出土遺物はなく、詳細な時期は不明である。

2 東 区

Kd2-1～Kj5-2 グリッドに位置する（第12図）。調査区の規模は、幅 7 m、長さ 54 m で、4 つの調査区のうち、最も面積が広い。現地表面から深さ 30～50 cm で遺構確認面となる。検出した遺構は、郭と堀のほかに溝 1 条、土坑 1 基である。郭と堀については、土地更正図から館の南隅部に該当すると推定される。

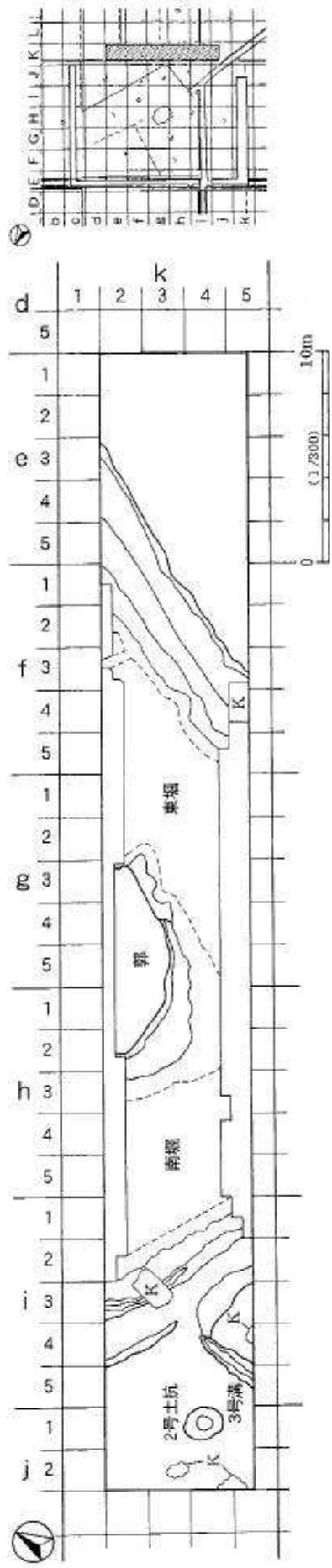
郭（第13図）

調査区の中央部、Kg2-2～Kh4-3 グリッドにおいて、郭の南隅部を検出した。ただし、調査の際に上部を削平したため、本来の上端の範囲はさらに狭まる。郭内から遺構は検出していない。土層断面図については、調査区および階段状に掘り下げた未調査部分の壁を合成して作成した。

断面を観察した結果、検出した部分については、盛土をしていることが明らかとなった。その手順は次の通りである。最初に、地山の暗灰黄色砂を基壇状に削り出す。次いで、その中央部分を幅 5.0 m、深さ 0.4 m ほど掘り込み、周縁部の地山を土手状に残す。地山を覆うように、シルトと粘質土を 20 cm から厚い部分では 50 cm ほど盛土する。さらにその上に砂質土などを盛土し、最終的には、当初の削り出した地山よりも 30～40 cm 高く郭を構築する、というものである。また、郭の南側の地山斜面で確認した砂質土（3・9 層）も、その堆積状況から、盛土の一環と考えられる。これらの盛土は、地山が砂で崩れやすいため、郭を保護・補強する目的があったものと推測される。なお、郭内から遺物が出土していないため、その詳細な時期については不明であるが、ここでは、館の構築時に盛土されたものと考えておきたい。

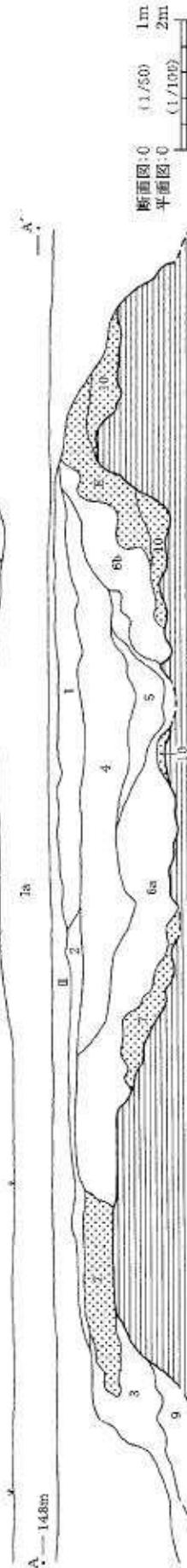
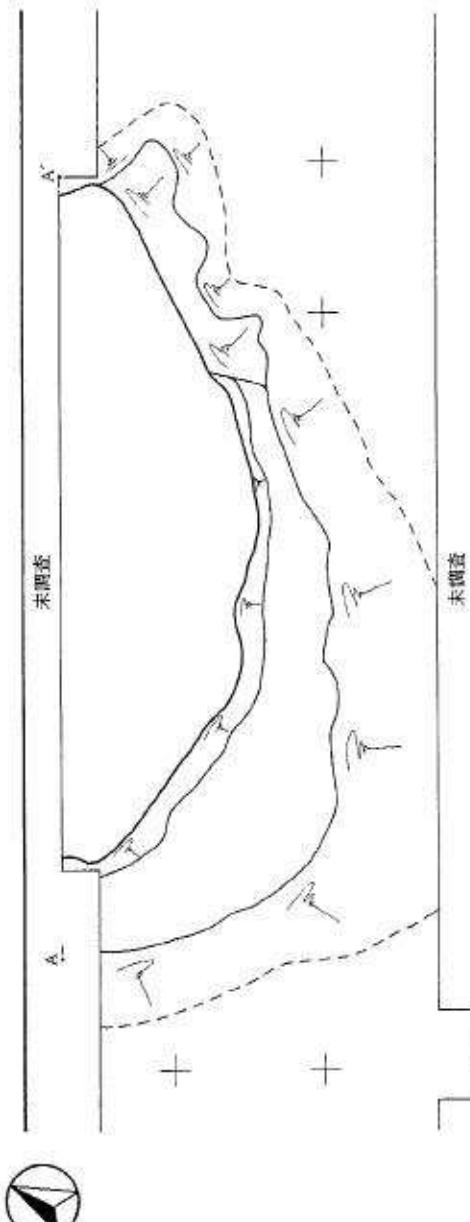
南 堀（第14図）

調査区南部のKi2-4～5-4 グリッドで、郭の南隅を巡る堀の肩部を検出した。館の外側にあたる。反対側にあたる郭側の肩部については、第13図の土層断面で確認することができる。すなわち、3 層の黒褐色砂質土の落ち込み際がそれに該当する。堀の幅は推定で 12.6 m、底面については、未検出のため深さや平面形態は不明である。館外側からの掘り込みは、確認面から深さ 1.1 m まで調査した結果、三段であることを確認できた。一段目は、確認面から 30 cm ほどの深さをかなり緩やかに掘り込み、幅 1.0～1.6 m のテラス面となる。なお、Ki3-4・4-4 グリッドにおいて肩部のプランが一部不明瞭となるが、これは後世の削平などの影響によるものと考えられる。

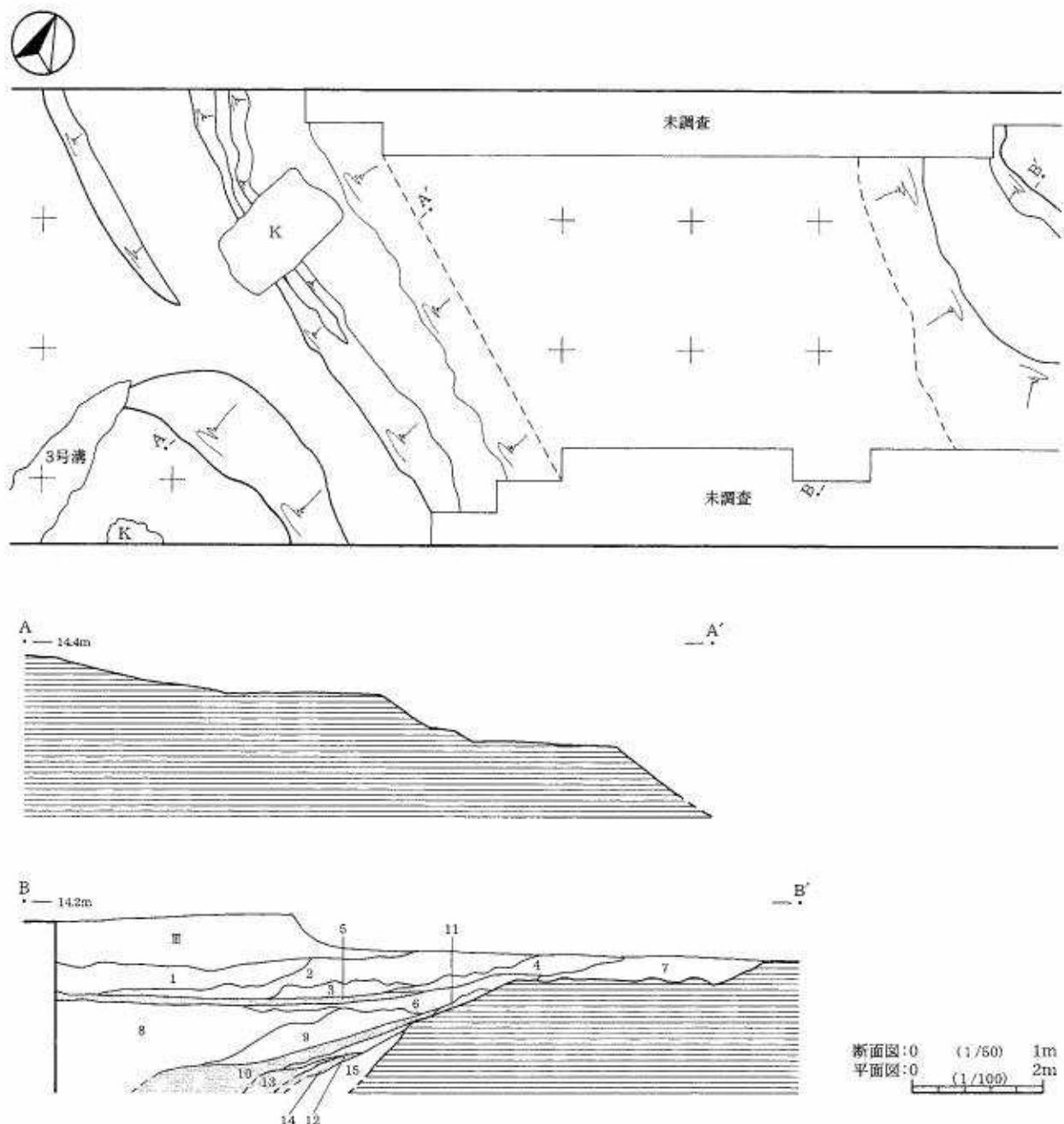


第12図 東区 造橋配置図

東区 事
1. 2.5Y3/1黒褐色土 粒砂が多い砂状に軟糸帶状する。褐色粘土ブロック
-に、ふい黄色粘質シルト層を含む。
2. 黑褐色粘質土 粒砂を少量含む。
3. 2.5Y3/2黒褐色粘質土 砂を多量に含む。黄色シルトブロックを少量含む。
4. 2.5Y3/2黒褐色粘質土 地を多量含む。
5. 2.5Y3/2黒褐色粘質土 しまりや弱い炭化物粒を微量含む。
6. 2.5Y3/2黒褐色粘質土 小ブロック-に、
黄色シルト粒およびブロックを底状に少量含む。
6b. 2.5Y3/2黒褐色粘質土 粒性強く、しまりや弱い。暗灰黄色粘質シルト
層およびブロックを少量含む。
7. 2.5Y6/4にふい黄色シルト 地山のような塊状で含有物をほとんど含ま
ない。
8. 2.5Y4/2暗灰黄色粘質シルト しまりや弱い。黑褐色粘土を地一に少
量含む。
9. 2.5Y4/1暗灰黄色粘質土 地山の暗灰黄色地色が互層状に堆積する。
10. 2.5Y4/2暗灰黄色 たぶい黄色粘質シルトブロックを極く含む。



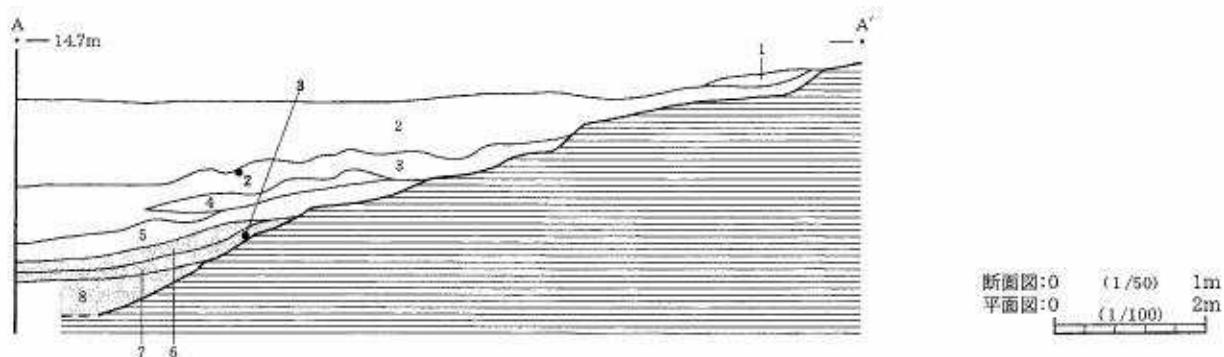
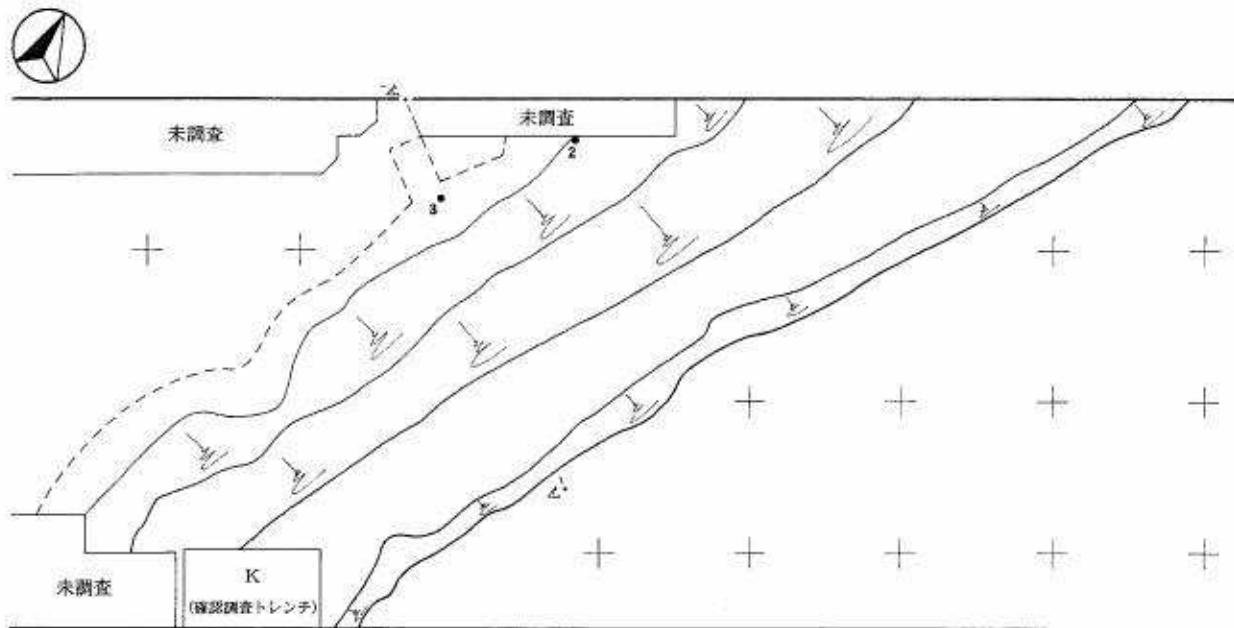
第13図 東区 鄭実測図



東区 南堀

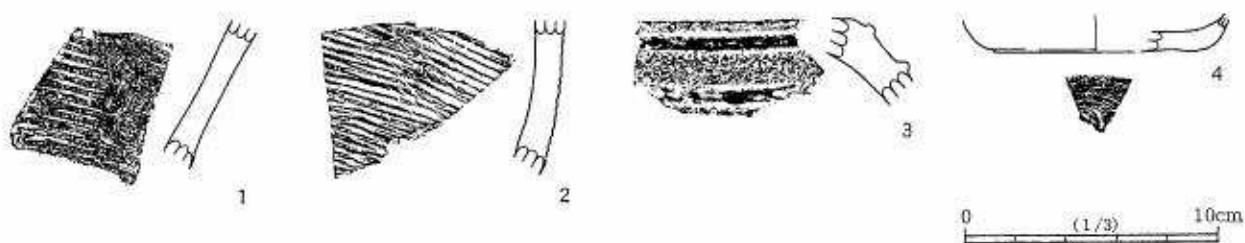
- 1 2.5Y4/2暗灰黄色砂質土 しまりあり、粗砂をやや多く、黄灰色シルト粒および小ブロックを少量含む。
- 2 2.5Y4/2暗灰黄色砂質土 しまりあり、オリーブ黄色シルトブロックを斑状に多量含む。
- 3 2.5Y4/2暗灰黄色砂質土 砂の含有にムラあり。
- 4 2.5Y4/2暗灰黄色砂質土 粘性あり。色調はやや暗い。砂の含有は少ない。
- 5 2.5Y4/1黄灰黄色粘土 粘性強く、しまり弱い、粗砂を少量含む。
- 6 2.5Y4/1黄灰黄色砂質土 しまりあり。粗砂を多量、灰色粘土ブロックを少量含む。
- 7 2.5Y4/2暗灰黄色砂質土 しまりあり。黒褐色土・粗砂ブロックが互層気味に粗く混じる。オリーブ黄色シルトブロックを多量含む。
- 8 5Y4/1灰色砂質土 しまりややあり。黒色粘土小ブロック・灰オリーブ色シルト小ブロック・粗砂ブロックを斑状に粗く含む。
- 9 5Y4/1灰色砂質土 しまり弱い。粘質土を斑状に含む。
- 10 2.5Y2/1黒色粘土 しまりややあり。斜面上方は黑色土、含有物なし。
- 11 2.5Y4/2暗灰黄色砂質土 しまり弱い。色調は暗い。
- 12 5Y4/1灰色土質粗砂 色調は暗い。
- 13 5Y3/1オリーブ黑色粘土 しまりやや弱い。粗砂を少量含む。
- 14 2.5Y3/2黒褐色粘土 しまり弱い。
- 15 5Y4/1灰色砂質土 しまり弱い。色調はやや暗い。

第14図 東区 南堀実測図



東区 東堀

- 1 2.5Y7/4浅黄色粘質シルト 暗灰黄色砂質土を微量含む。地山に類似。
- 2 2.5Y4/2暗灰黄色砂質(粗砂)土 粘性あり、しまりやや弱いが部分的にしまる。オリーブ黄色小ブロックを少量含む。
- 3 2.5Y4/2暗灰黄色砂質土 粘性あり、しまりやや弱い。オリーブ黄色シルト小ブロックをやや多く含む。
- 4 10YR4/2灰黄褐色粗砂 しまりあり。暗灰黄色砂質土小ブロックを少量含む。
- 5 2.5Y4/2暗灰黄色砂質土 粘性強く、しまり弱い。灰黄褐色粗砂を斑状に、オリーブ黄色シルトブロックを少量含む。
- 6 2.5Y4/1黄灰色～2.5Y2/1黒色粘土 粘性ややあり、しまりあり。含有物なし。
- 7 5Y4/1灰色砂質粘土 粗砂を均一に多量、炭化物粒を微量含む。
- 8 10Y5/1灰色粘土 しまり極めて弱い。

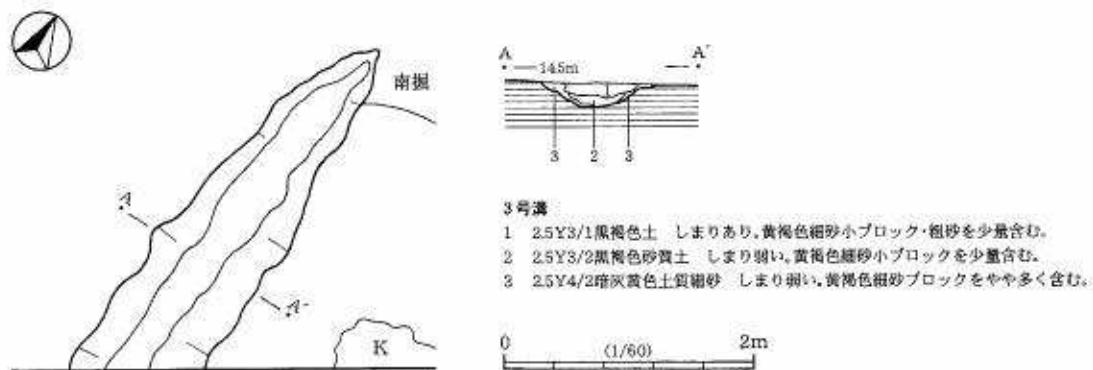


第15図 東区 東堀実測図および出土遺物

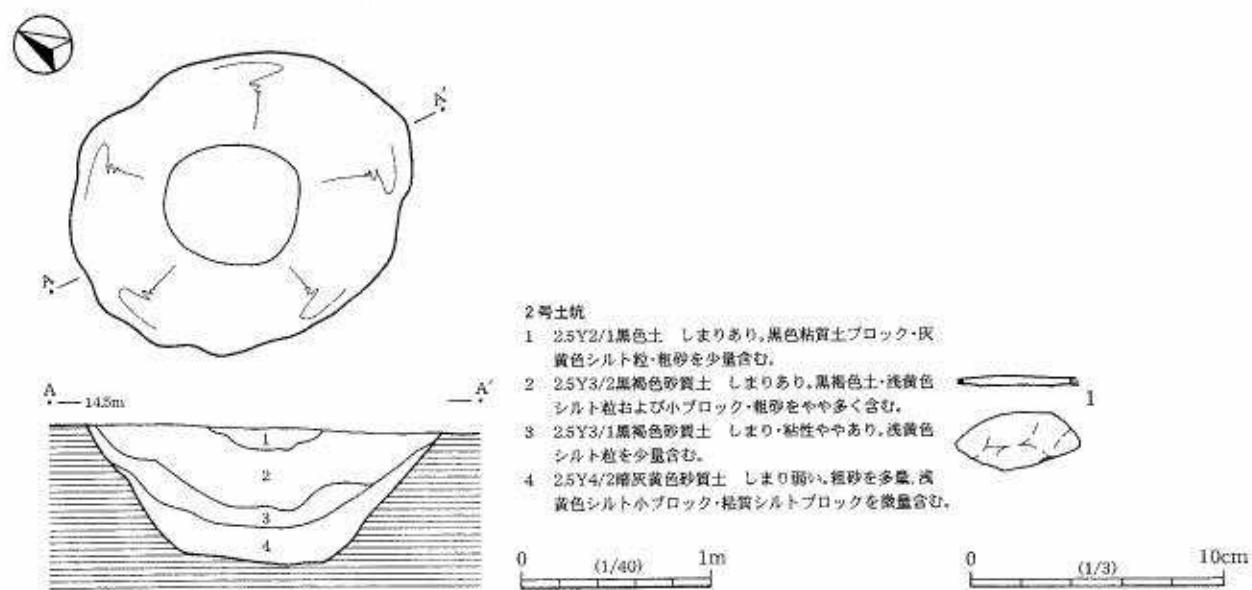
二段目は、テラス面から35cmの深さを比較的急な傾斜で掘り込み、幅0.6~1.2mのテラス面となる。斜面の中には、幅20cmほどの狭い平坦面が認められる。そしてその先の三段目は、急な傾斜で掘り込む。郭側からの掘り込みは、緩やかな傾斜から途中でかなり急な傾斜へと変わる。テラス面は認められない。埋土は、検出した範囲においては15層に分けられ、うち10・13・14層の粘土は、堀の帶水を示す水成堆積である。なお、7層の暗灰黄色砂質土は、郭の盛土と考えられ、第13図の土層断面の9層に相当する。出土した遺物は、古墳時代の土師器で、壊もしくは壘の破片である。いずれも混入であり、図化していない。

東 堀（第15図）

調査区の北部、Ke2-3~Kf5-3グリッドにおいて、郭の東側を巡る堀の肩部を検出した。館の外側にあたる。郭側の肩部は、南堀と同様、第13図の土層断面からその位置を確認できる。堀の幅は推定で11.1m、確認面から底面までの深さは1.6mで、二段に掘り込んでいる。一段目は、確認面から20cmほどの深さまで掘り込み、幅1.0~1.5mのテラス面となる。二段目は、テラス面から1.3mの深さを比較的急な傾斜で掘り込み、底面に至る。底面は、Via層より下の粗砂層まで掘り込む。平面形態については、土層断面を観察する際に部分的な狭い範囲しか検出していないため、不明である。埋土は砂質土と粘土を主体とし、8層に分けられる。そのうち、下半に堆積する粘土（6~8層）は堀の帶水によるものと考えられる。遺物は、図化したもの以外では、断面に漆の付着した古瀬戸の花瓶が1点出土している。また、混入と考えられる古墳時代土師器の小片が2点出土している。



第16図 3号溝実測図



第17図 2号土坑実測図および出土遺物

3号溝（第16図）

調査区の南部、K14-4～5-5 グリッドに位置する。最大幅は 1.9m、確認面からの深さは 40 cm で、南北方向に延びる。先端部は南堀の肩部と重複するが、新旧関係は判然としない。底面は平坦で、壁は上方に開きながら立ち上がる。埋土は 3 層に分けられる。

埋土の 1・2 層からは各 1 点ずつ古墳時代の土師器小片が出土したが、混入によるものと考えられる。遺構に伴う遺物はなく、詳細な時期は不明である。

2号土坑（第17図）

調査区の南部、Kj3-1～4-1 グリッドに位置する。平面はやや不整な梢円形で、長軸 3.7m、短軸 3.0m、確認面からの深さは 1.4m である。底面は平坦で、壁は上方に開きながら立ち上がる。埋土は黒褐色砂質土と暗灰黄色砂質土を主体とし、4 層に分けられる。

2 層の黒褐色砂質土からは、かわらけ（1）のほかに、古瀬戸の平碗が 1 点出土している。ただし小片のため図化していない。本土坑の時期は、出土遺物から 15 世紀と考えられる。なお、古墳時代の土師器壺・甕の小片が 7 点出土しているが、混入によるものと考えられる。

3 北 区

Ee4-2～Jc5-3 グリッドに位置する。調査区の規模は、幅 3.0m、長さ 54.0m で、その幅は南・東区に比べて狭い。現地表面から 20～40 cm ほどの深さで遺構確認面となる。検出した遺構は堀と郭で、土地更正図から、館の東隅部から北部に該当すると推定される。

郭・東 堀（第19図）

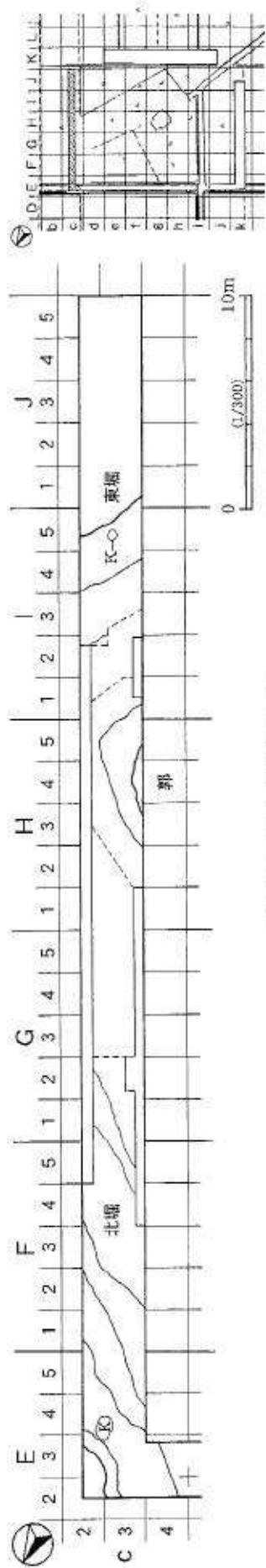
調査区中央部やや東の Hc3-3～5-3 グリッドでは郭の東隅部を、東部の Ic5-2～Jc1-3 グリッドでは郭の東側を巡る堀の肩部を検出した。郭は、地山を削り出して造られ、盛土等は認められなかった。検出した幅は最大で 56 cm と狭く、遺構は確認できなかった。

堀の幅は推定で 10.3m、確認面から底面までの深さは 1.7m である。検出した肩部は、館の外側にあたる。その掘り込みは、肩部から幅 2.2m ほどまではかなり緩やかな傾斜であるが、そこから先は比較的急な角度で底面に至る。テラス面は認められなかった。反対側の郭側からは、緩やかな傾斜で底面まで掘り込む。底面については、一部しか検出していないため、平面形態は不明である。なお、地山の VIa 層より下の粗砂層まで掘り込んでいるが、西・南堀とは異なり、水の浸み出しは認められなかった。堀の埋土は、暗灰黄色砂質土・土質砂の上にⅢ層が 90 cm 以上と厚く堆積する。堀の帶水を示す水成堆積層は確認できなかった。遺物は、Ⅲ層から珠洲の片口鉢（1）と灯明皿として使用されたかわらけ（2）が出土しただけである。

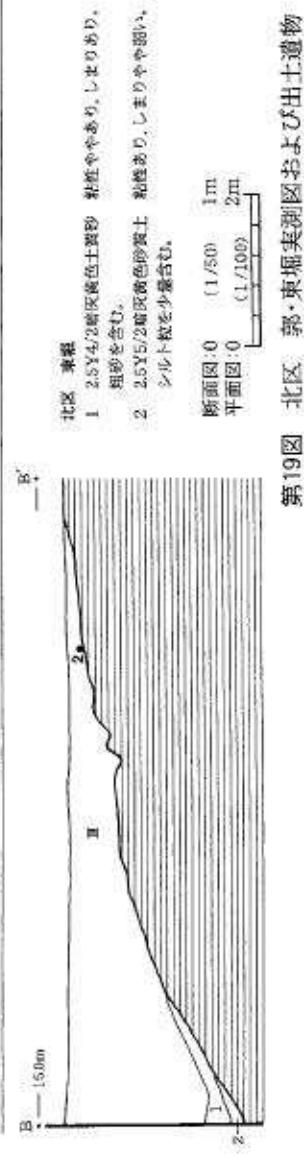
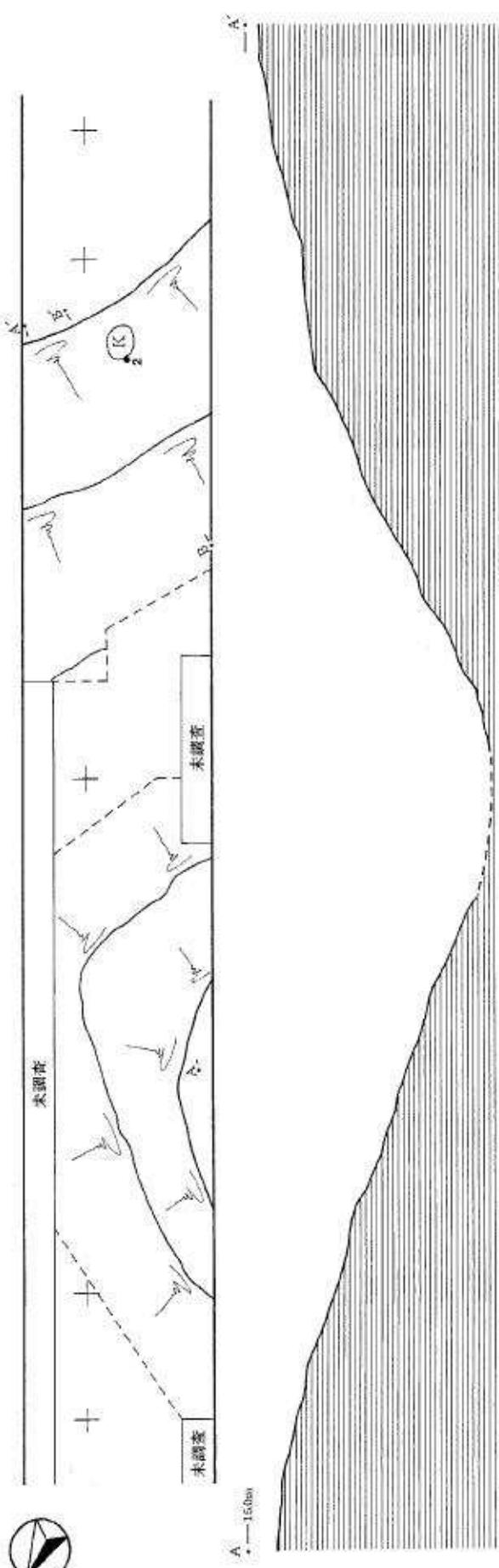
北 堀（第20図）

調査区の西部、Ee4-3～Fcl-2 グリッドにおいて、郭の北側を巡る堀の掘り込み際を検出した。当初は、館外側の肩部ととらえていたが、西区の Ee2-3・3-2・3-3 グリッドを調査した結果、堀の二段目の掘り込み際であることがわかった。ここでは、西区の調査結果を一部加味して、検出した北堀について記載する。

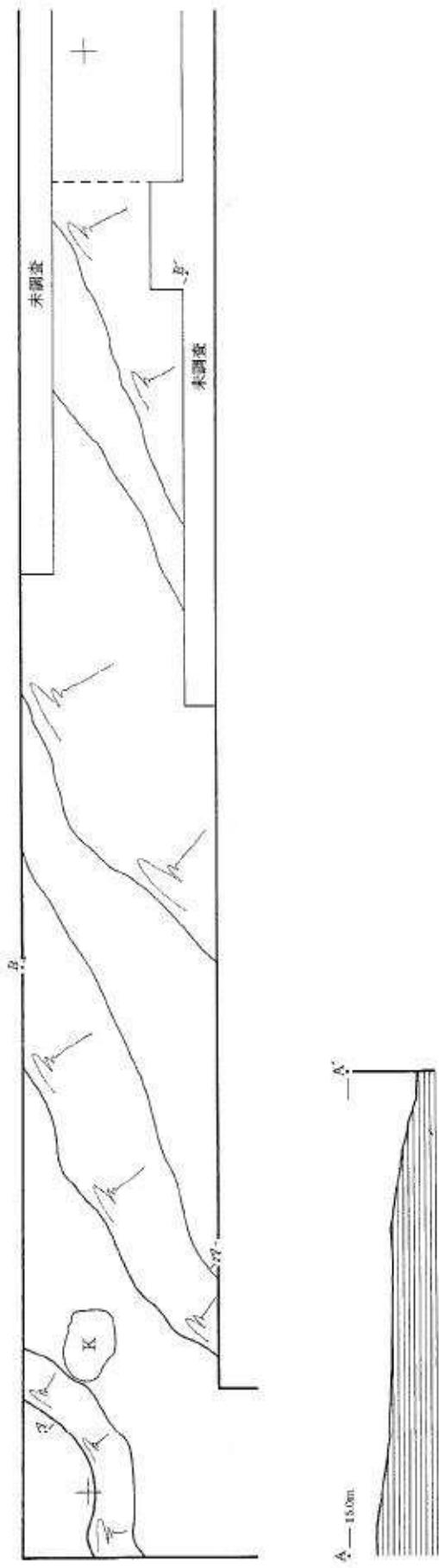
館の外側からは、堀を二段に掘り込んでいる。一段目は、Ee2-3～3-3 グリッドで検出した肩部から 10 cm ほどの深さをかなり緩やかに掘り込んだ後、幅 1.6～2.5m ほどの広いテラス面となる。二段目は、掘り込み際から幅 4.0m ほどまではかなり緩やかな、そこから先はやや角度をもった緩やかな傾斜となる。底面は確認できていない。なお、緩やかな斜面の途中に幅 1.1～1.8m と 0.5～1.0m の平坦面が認められるが、これはテラス面を意識して作り出したのではなく、掘り込んだ際、結果的に平坦になってしまったものと推測される。遺物は出土していない。



第18図 北区 遺構配置図



第19図 北区 郭・東堀実測図および出土遺物

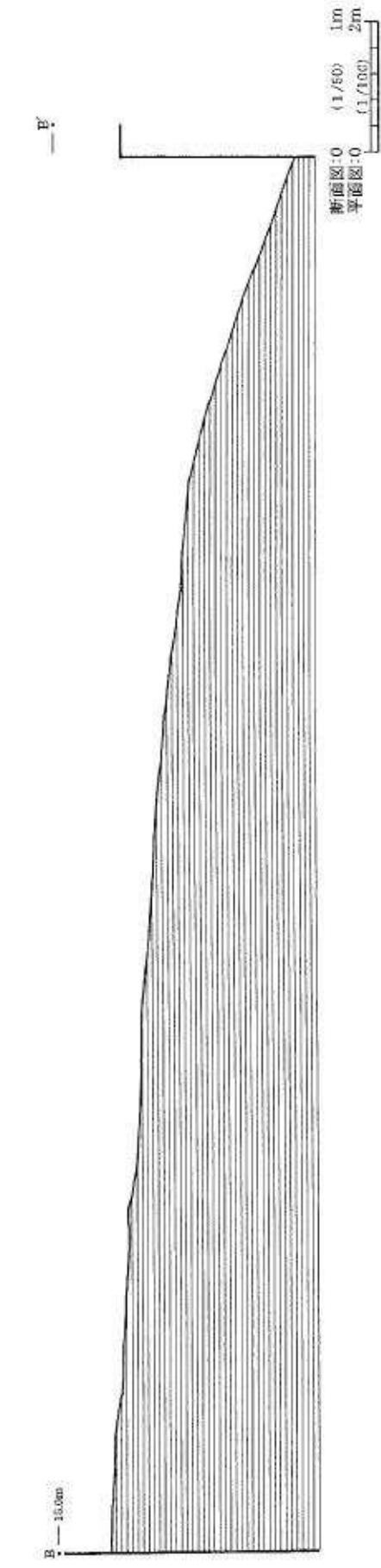


A—150m

B—150m

E'

F'



未調查
B-E'
1m
(1/50)
2m
(1/100)

第20圖 北区 北塊実測図

4 西 区

Ec2-2～Ek3-4 グリッドに位置する。調査区の規模は、幅 2.5m、長さ 84m と、4 つの調査区の中で、最も狭く長い。調査時の現況は、他の調査区が水田であったのに対して、本調査区は砂利敷きの農道であった。なお、Ei2-3～3-5 グリッドについては、調査の都合上、掘削を行わないこととした。現地表面から遺構確認面までの深さは、Ec・Ed グリッドでは 25 cm ほど、Ej・Ek グリッドでは 60 cm ほどであったのに対して、Ee～Ei グリッドでは、農道の砂利を除去するとすぐに地山が現れた。しかも近世以降の擾乱の影響が広く及んでおり、その遺存状態は良くなかった。検出した遺構は堀と郭で、土地更正図から、館の北～西部に該当すると推定される。なお、郭内からは小ピットを 3 基検出した。

北 堀（第 22・23 図）

調査区の北部、Ec2-3～3-3 グリッドと Ee2-1・3-1 グリッドにおいて、郭の北側を巡る堀の肩部を検出した。堀の幅は推定で 17.4m、確認面から底面までの深さは 1.7m ほどである。底面は、他の調査区で検出した堀と同様、地山の VIa 層より下の粗砂層まで掘り込んでいる。平面形態については、一部の狭い範囲でしか検出していないため不明である。

Ec2-3～3-3 グリッドで検出した肩部は、館の外側にあたる。「3 北 区」で既述したように、掘り込みは二段である。一段目は、20 cm ほどの深さをかなり緩やかに掘り込み、幅 2.0m 以上の広いテラス面となる。二段目は、幅 3.0m ほどまではかなり緩やかな傾斜で、そこから先は底面まで比較的急な傾斜で掘り込んでいる。北区で検出した二段目とは異なり、斜面に平坦面は認められない。

Ee2-1・3-1 グリッドで検出した肩部は、郭側にあたる。肩部から幅 2.2m までは、平坦に近いかなり緩い傾斜で掘り込む。そこから幅 2.3m までは緩やかな傾斜で、その先は急な傾斜で掘り込む。埋土は、検出した範囲では砂質土が主体で、8 層に分けられる。なお、検土杖でポーリング探査したところ、灰色砂（8 層）の下は厚さ 15 cm ほどの黒色粘土、その下は地山の黒褐色粗砂であった。

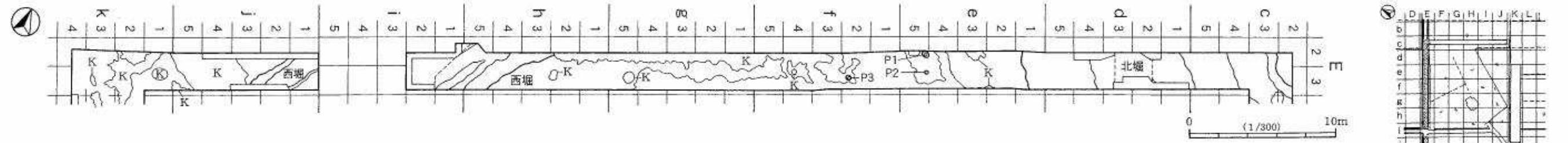
遺物は、主に 1 層の黄灰色砂質土から出土している。14 点を図化した。そのほかに、小片のため図化しなかったが、古瀬戸の碗形鉢が 1 点、土師質土器のかわらけが 2 点出土している。

西 堀（第 22・24 図）

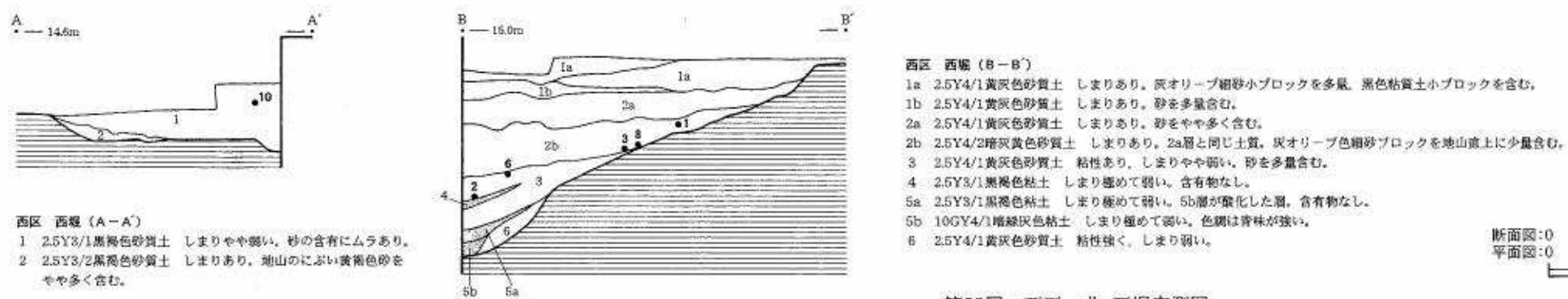
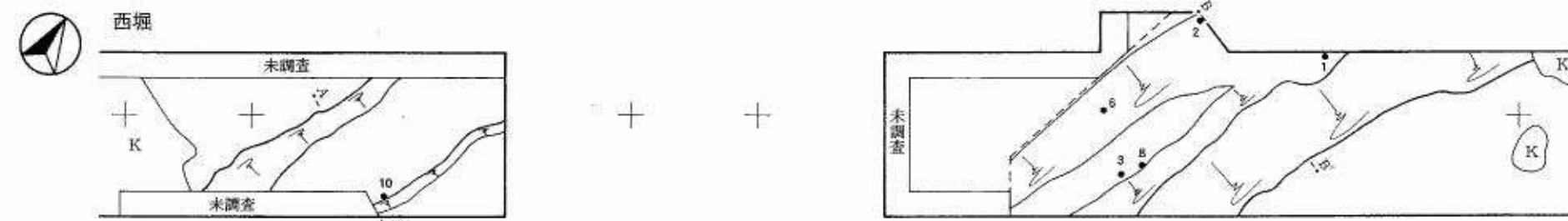
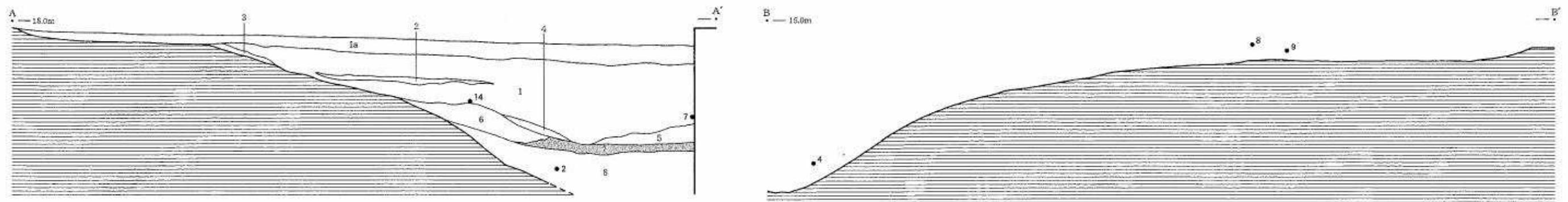
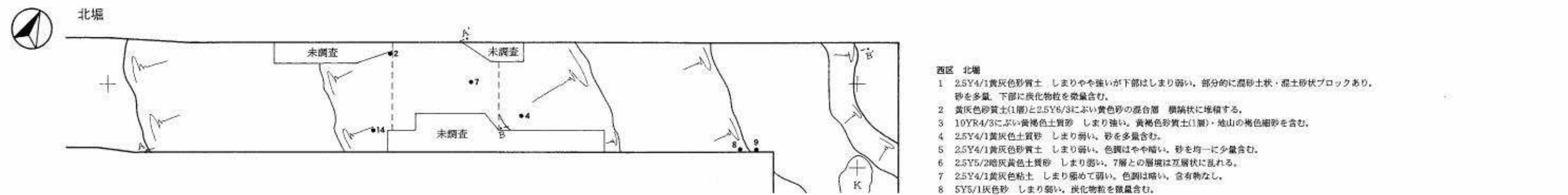
調査区の南部、Eh2-2～Ej3-3 グリッドにおいて、郭の西側を巡る堀の肩部を検出した。堀の幅は推定で 8.3m、確認面から底面までの深さは 1.6m である。

Eh2-2～3-5 グリッドで検出した肩部は、郭側のそれにあたる。肩部から底面までは比較的急な傾斜で掘り込み、斜面の途中に平坦面は認められない。底面は、地山の VIa 層より下の粗砂層まで掘り込む。平面形態については、一部の狭い範囲でしか検出してないため不明である。埋土は合計で 9 層に分けられる（B-B'）。砂質土が主体で、下位には粘土（4～5b 層）が堆積する。粘土は、堀の帶水による水成堆積層と考えられる。遺物は 1a・b 層、2b 層、3 層の黄灰色・暗黄灰色砂質土から出土している。古瀬戸の平碗や珠洲の片口鉢・壺を 9 点（1～9）図化した。そのほかに、図化しなかったが、古瀬戸の壺やかわらけの小片などがわずかに出土している。

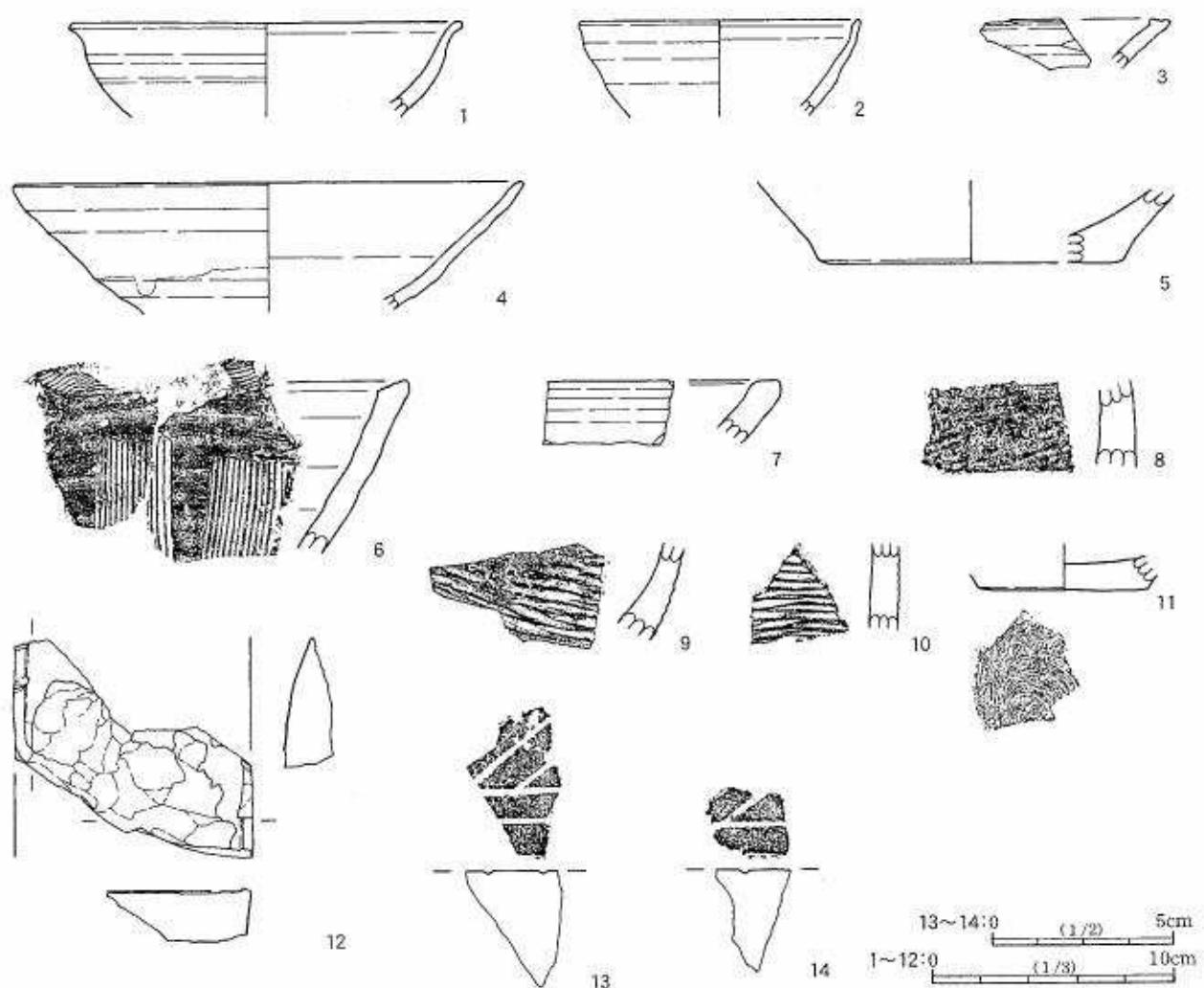
農道を挟んで南側の Ej2-2～3-3 グリッドで検出した堀の掘り込みは、館外側の肩部にあたる。ラインを延長すると、南区で検出した西堀の肩部につながる。なお、周辺は近世以降の擾乱の影響が広く及んでおり、遺存状態はあまり良くなかった。肩部からの掘り込みは二段目まで検出することができた。一段目は、確認面から 20 cm の深さまで掘り込んだ後、幅 1.3～1.4m のテラス面となる。二段目は、そこからさらに 10 cm 掘り込み、幅 1.0m 以上のテラス面となる。どちらも掘り込みの傾斜は比較的急な角度である。埋土は黒褐色砂質土で、2 層に分けられる。（A-A'）。遺物は、1 層から珠洲の壺が 1 点（10）だけ出土した。



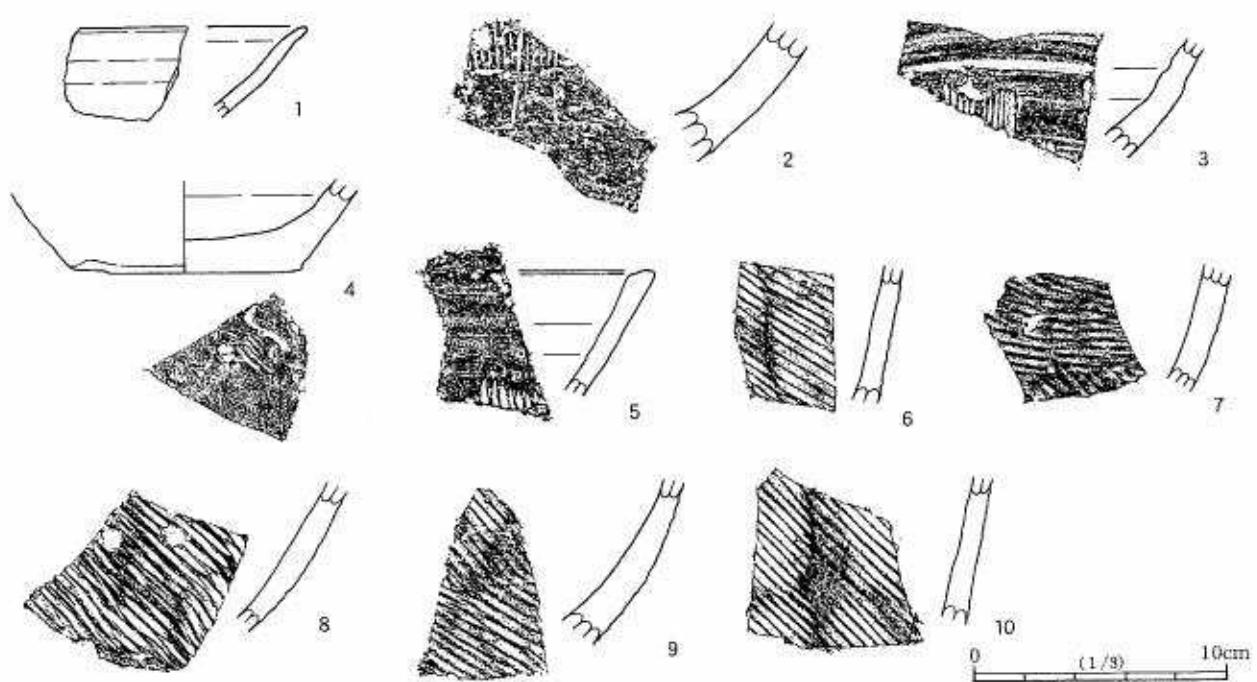
第21図 西区 遺構配置図



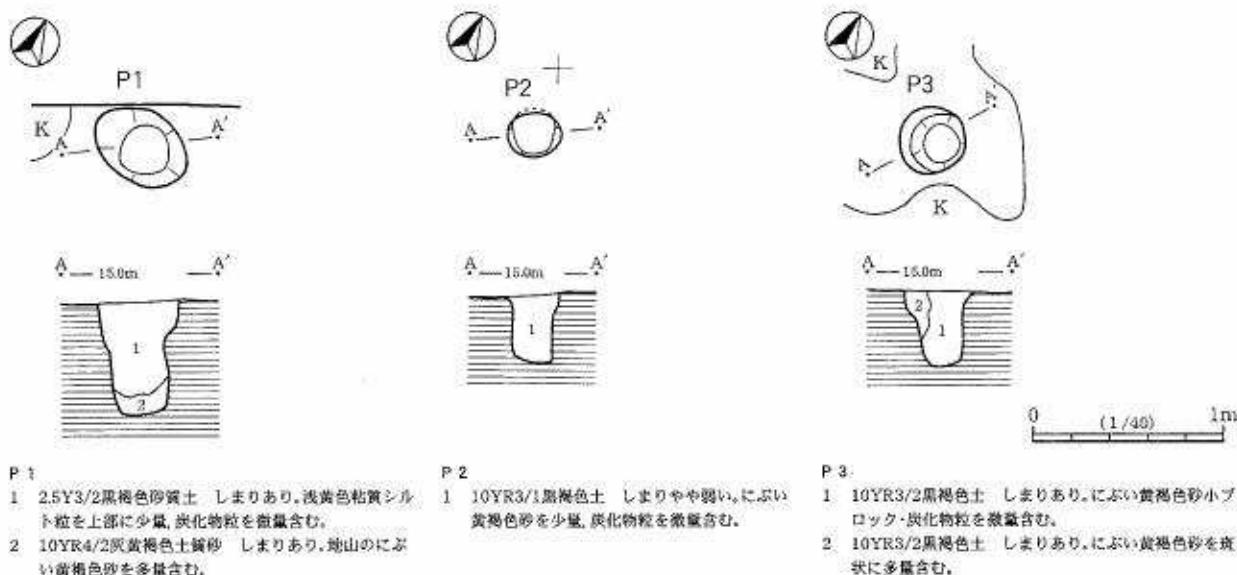
第22図 西区 北・西堀実測図



第23図 西区 北堀出土遺物



第24図 西区 西堀出土遺物



第25図 1～3号小ピット実測図

1～3号小ピット (P 1～3) (第25図)

Ee2-1～Eh3-4 グリッドは郭内に該当する。しかし、既述したように、近世以降の搅乱の影響によりその遺存状態は良くなく、検出した遺構は小ピット3基だけであった。

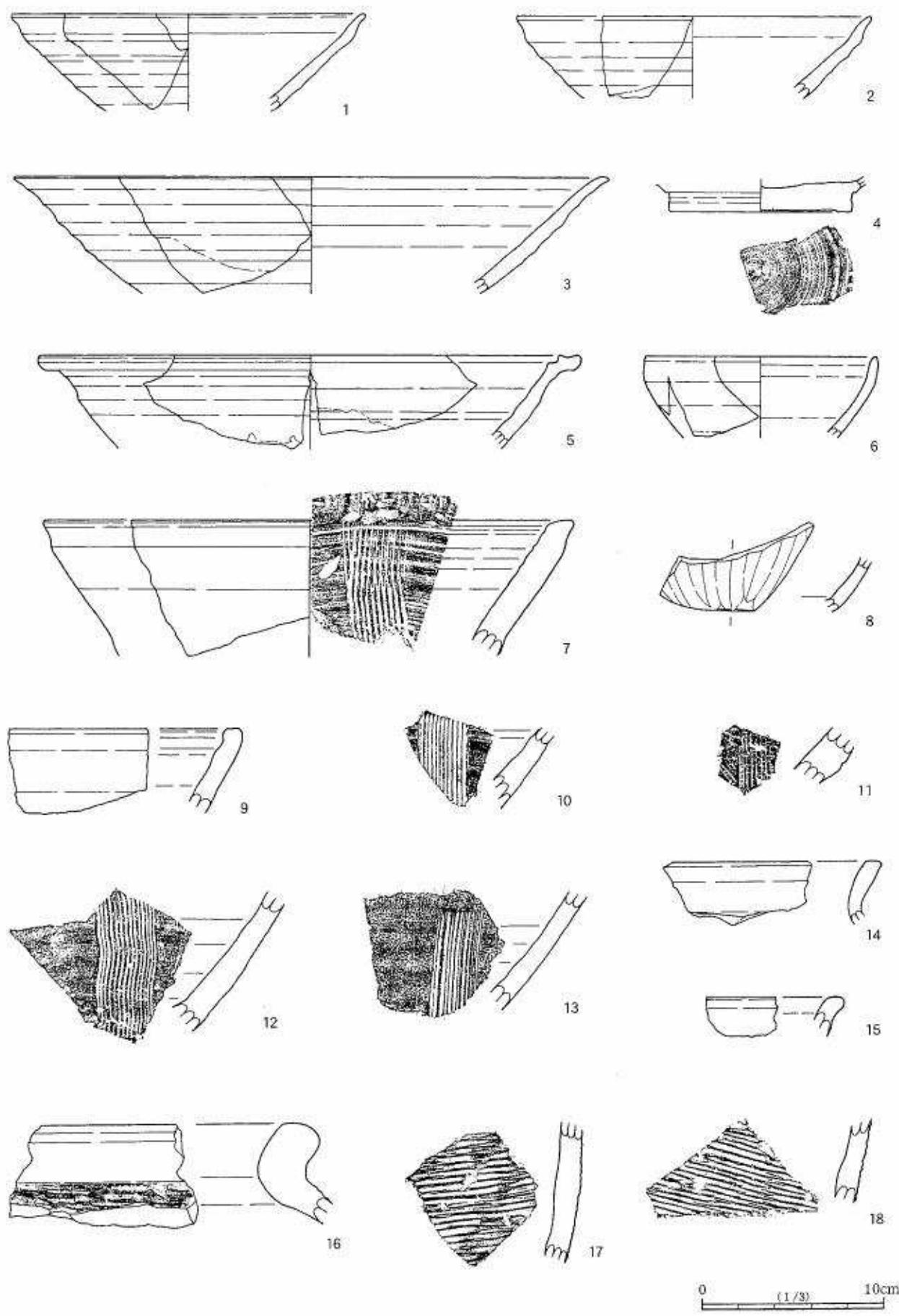
P 1は、調査区の東壁の際、Ee2-5 グリッドに位置する。平面は長軸 56 cm、短軸 38 cm の楕円形である。確認面からの深さは 60 cm で、埋土は2層に分けられる。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。出土遺物はなく、詳細な時期は不明である。

P 2は、Ee3-5 グリッドに位置し、P 1からは東へ 0.9m 離れている。平面は長軸 28 cm、短軸 23 cm の円形で、確認面からの深さは 35 cm、埋土は黒褐色土の単一層である。底面は平坦で、壁は垂直に立ち上がり、上部でやや外に開く。出土遺物はなく、詳細な時期は不明である。

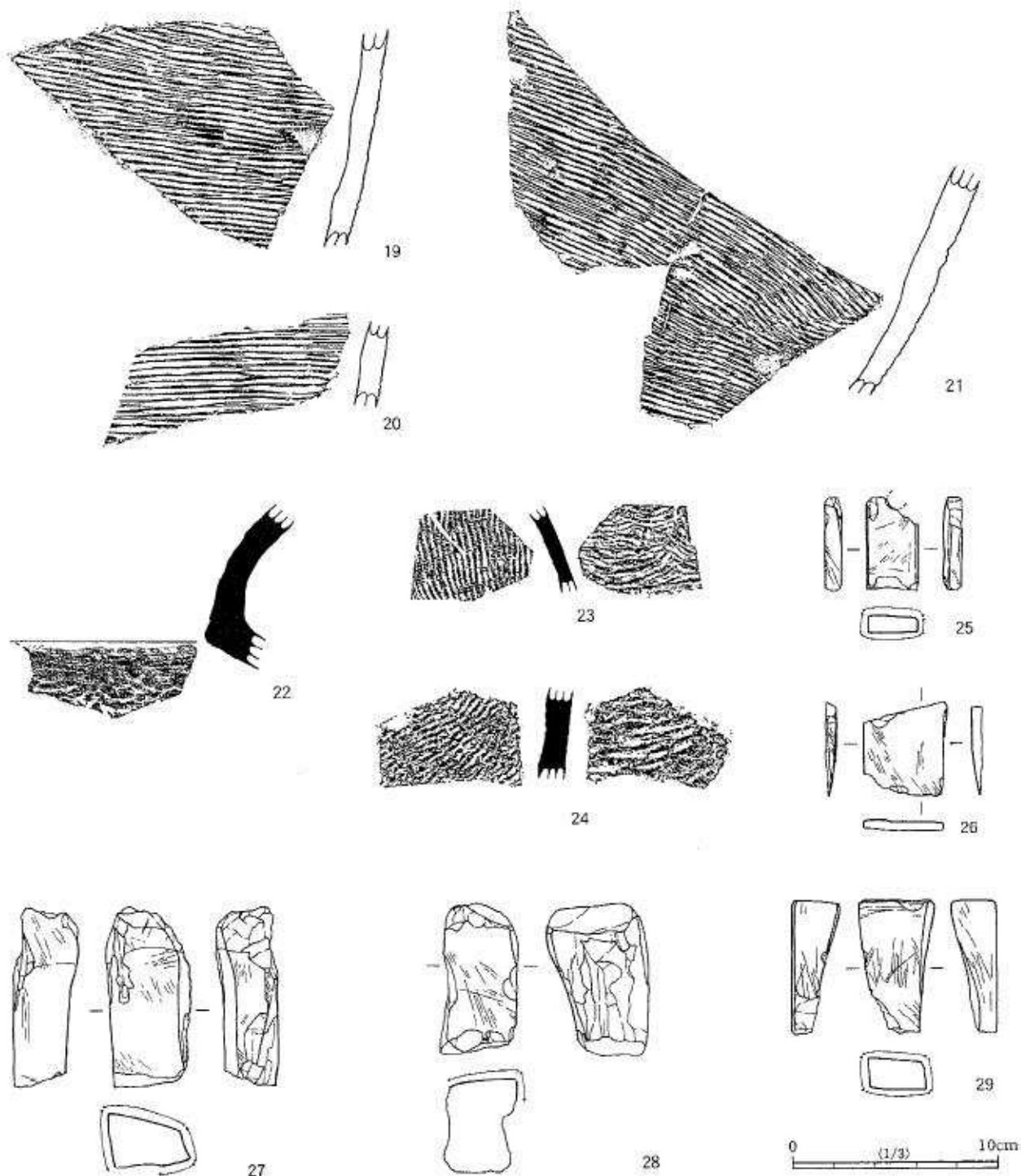
P 3は、Ef3-2 グリッドに位置する。平面は長軸 36 cm、短軸 34 cm の円形である。確認面からの深さは 40 cm で、埋土は黒褐色土で2層に分けられる。底面は平坦で、壁は垂直に立ち上がり、上部でやや外に開く。出土遺物はなく、詳細な時期は不明である。

5 遺構外・搅乱出土遺物 (第26・27図)

遺構外では、主にⅢ層から中世の遺物が出土している。ただし、その多くが、遺構出土の遺物と同様に小片であり、器形を復元できるものは少ない。種別は主に、古瀬戸と珠洲で、そのほかに石製品の磁石などが出土した。なお、古墳時代の土師器・須恵器も比較的多く出土したが、これは古墳時代の遺物包含地である太斎遺跡が隣接しているためと考えられる。ここでは、Ⅲ層から出土した中世の遺物を中心に、搅乱などから出土したものも加えて、29点を図化した。



第26図 遺構外・櫻乱出土遺物（1）

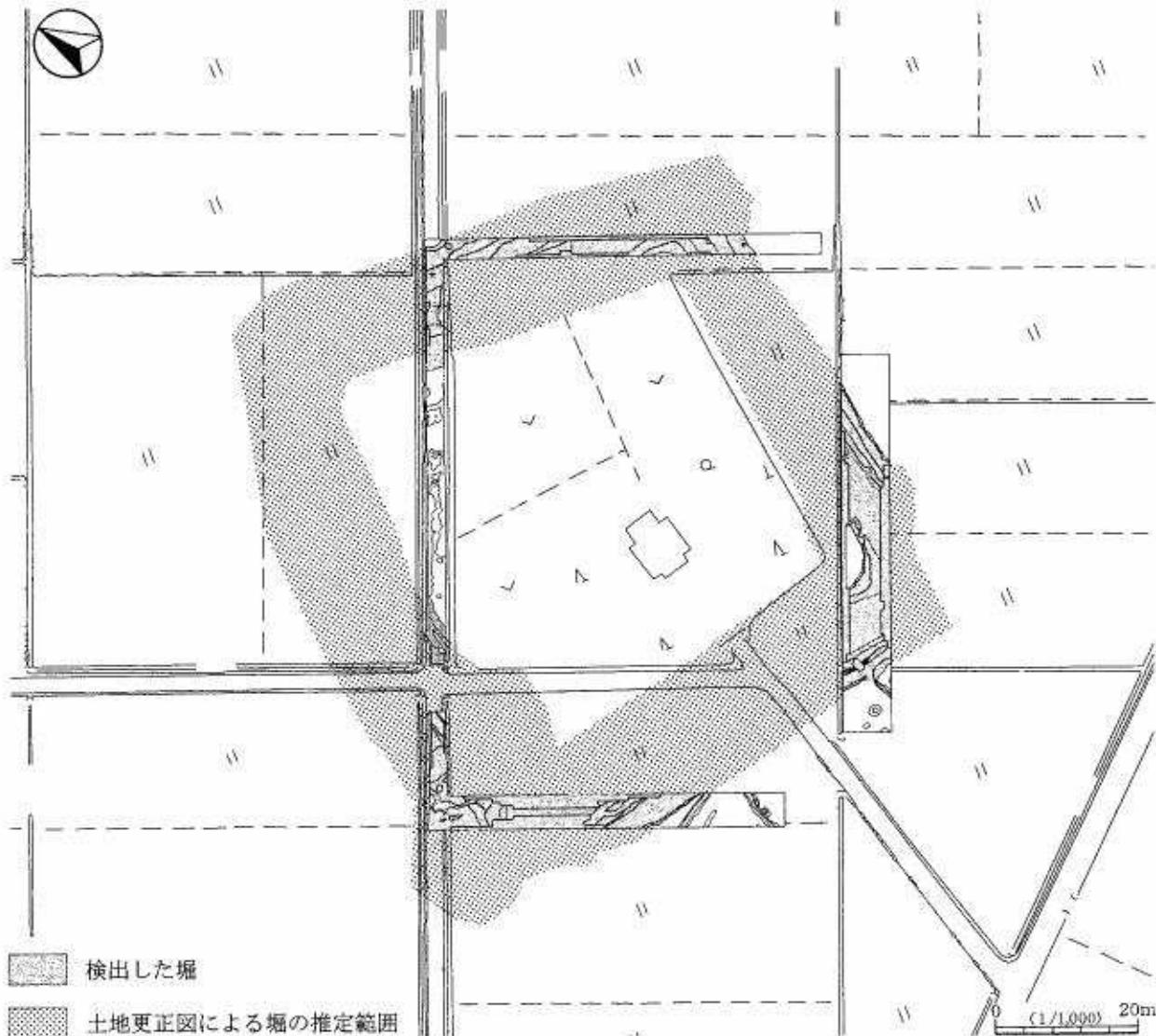


第27図 遺構外・攪乱出土遺物（2）

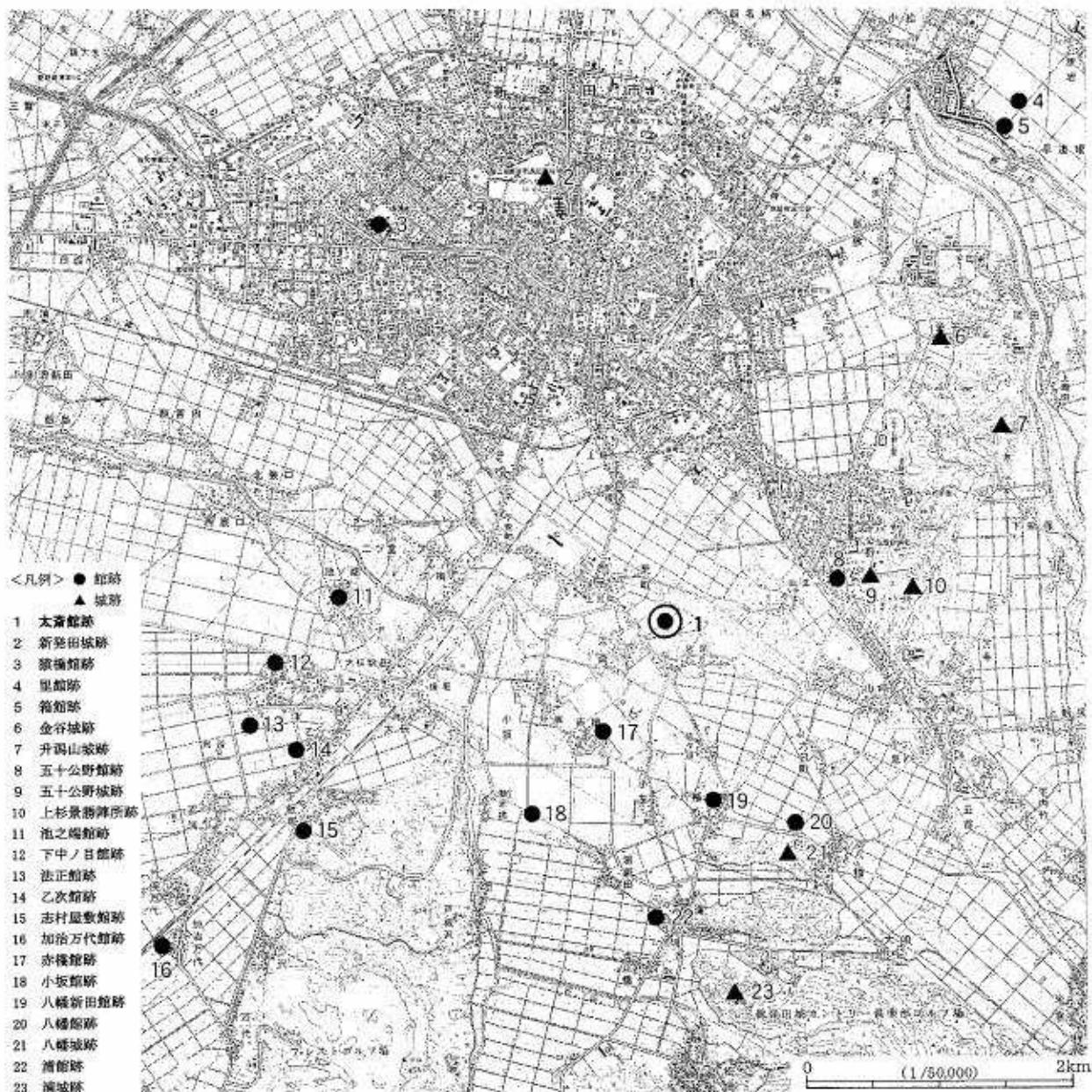
第III章 まとめ

太斎館跡は、明治時代の土地更正図および確認調査の結果から、堀を含めて、一边が約80mの単郭式方形居館であることが明らかとなっている。今回の調査では、館の郭と堀の一部を検出することができた。なお、その他に溝3条、土坑2基を検出したが、館の範囲外に位置しており、その性格や館との関係は明らかではない。

郭は、地山を削り出して造られているが、南隅部では、地山を一部掘り込んだ後に盛土をしていることが確認できた。地山が砂で崩れやすいために、それを補強・保護する目的で行ったものと考えられる。郭内の調査では、攪乱の影響が広範囲に及んでおり、土壠や建物跡を検出することはできなかった。しかし、堀の埋土を観察すると、上半に堆積する砂質土の状況から、短期間で堀が埋められていることを確認することができる。堀を持つ中世の方形居館の場合、その掘削で生じた土は土壠として郭側に盛ることが一般的であり、本館跡についても土壠は築かれていた可能性が高い。ここでは、土壠は後世に削平され、その土で堀の埋め戻しが行われたものと考えておきたい。



第28図 太斎館跡推定範囲



第29図 周辺の城館跡

堀は、郭側からは底面まで直線的に掘り込むのに対し、館の外側からは二段もしくはそれ以上の段に掘り込んでいる。特徴としては、一段目を20cmほど浅く掘り込んだ後、幅1.0m以上、場所によっては3.0mもの広いテラス面を設けている点を挙げることができる。また、掘り込みの角度は、郭側・館外側ともに10~30度前後と、堀としては比較的緩やかな傾斜といえる。これらが、館の立地している場所の地質的な要因によるものなのか、もしくはそれ以外の理由によるものなのかは、調査区が限定的であることもあって、明らかにはできなかった。埋土については、いずれの堀からも下位に水成堆積の粘土層が認められた。また調査時に、北区を除く調査区では、その底面付近から水が浸み出してきたことなどからも、当時、堀は帶水状態にあり、湿地状の景観であったと推測される。

検出した堀の範囲については、土地更正図から推測される範囲と概ね合致した(第28図)。ただし、西堀については、館外側の肩部の位置が大きく異なる。土地更正図の精度などを考慮に入れなければならないが、他の堀との整合性から考えて、西堀だけ大きく範囲が異なるとは考えにくい。ここでは、本来の館外側にあたる肩部は、

調査区の外に位置すると考えておきたい。そのように考えた場合、今回検出した西堀のそれは、二段目の掘り込みに該当する。遺構確認面と判断した西側に広がる平坦部分は、一段目のテラス面にあたり、館外側からの掘り込みは三段以上となる。以上を踏まえた上で、改めて館の規模をみてみると、郭は一辺が約46~60m、堀の幅は12~17mと推定される。

遺物は、郭内から出土していない。いずれも堀からの出土で、その種別は珠洲の片口鉢・壺・甕を主体とする。そのほかには、白磁、古瀬戸、かわらけなどが少量、また瓦質土器の風炉や硯・茶臼といった石製品もわずかに出土している。その年代は13世紀後半~15世紀後半にわたるが、わずかな遺物を除き、ほとんどのものが14世紀~15世紀前半の所産である。のことから、堀は遅くとも15世紀前半には廃絶しており、館はその機能を失っていたものと考えられる。

市内には現在、中世の城館跡が90箇所確認されている。そのうち、本館跡が位置する太賀地区およびその周辺区域は、城館跡が集中している地域の一つである(第29図)。従来、この付近一帯に城館跡が集中していることについては、天正期(16世紀後葉)の新発田重家と上杉景勝の争乱に関連付けて理解されてきた(新発田市史編纂委員会1980)。本館跡についても、『管窺武鑑』などの軍記物語の記載から、同争乱の折に新発田城の守りとして築かれたものと考えられてきていた(豊浦町史編さん委員会1987)。しかし今回の発掘調査の結果では、本館は遅くとも15世紀前半にはその機能を失っていたと考えられ、天正期の争乱とは直接関係していない可能性が高いことが明らかとなった。今後、周辺での調査が進み、資料がさらに蓄積された上で、改めて本館跡の性格や築かれた背景について検討する必要があるといえる。

引用・参考文献

- 石井 進・萩原三雄編 1991『中世の城と考古学』 新人物往来社
伊藤喜代子・鶴巻康志ほか 2006『太田遺跡・箱館跡発掘調査報告書』 新発田市教育委員会
上田秀夫 1982「14~16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究』第2号 日本貿易陶磁研究会
小野正敏編 2001『図解・日本の中世遺跡』 東京大学出版会
国土地理院 1993『1:25,000 土地条件図 新発田』
新発田市史編纂委員会編 1980『新発田市史』上巻 新発田市
珠洲市立珠洲焼資料館 1989『珠洲の名陶』
田中耕作 1983『小戸A遺跡・小戸館跡発掘調査報告書』 新発田市教育委員会
田中耕作 1986『宝積寺旧境内・三光館跡範囲確認調査報告書』 新発田市教育委員会
田中耕作・鶴巻康志ほか 1990『三光館跡・宝積寺館跡』 新発田市教育委員会
鶴巻康志・高橋正志 1999『寺内館跡発掘調査報告書』 新発田市教育委員会
豊浦町史編さん委員会編 1987『豊浦町史』 豊浦町
新潟県教育委員会 1987『新潟県中世城館跡等分布調査報告書』
藤澤良祐 2008『中世瀬戸窯の研究』 高志書院
吉井雅勇 2008『春木山遺跡I(中世編)』 荒川町教育委員会
吉岡康暢 1994『中世須恵器の研究』 吉川弘文館
MIHO MUSEUM 2010『古窯の踏 中世のやきものー六古窯とその周辺ー』

遺物観察表

※ 遺物の編年については、古瀬戸は藤澤2008、珠洲は珠洲焼資料館1989、吉岡1994を参照。

出土地点	番号	種別	計測値(cm)	色調・焼成・胎土	調整・技法の特徴	グリッド	備考
試掘 ・確認 (第4図)	1	土師器 壺	口径: 15.2 底径: 5.1 器高: 5.1	淡黄褐色。焼成良好。石英・長石を多く、雲母を少量含む。	外面は口縁部を横ナデ後、体部をヘラケズリ。内面はミガキ、黒色処理。	12トレンチ (H14調査)	5/6遺存
	2	土師器 壺	口径: (15.6) 器高: <9.4>	淡橙褐色。焼成やや軟。石英・長石・橙色粒を多く、雲母を少量含む。	外面は胴部を縦ハケ後、口縁部を横ナデ。内面は頸部以下を横ハケ。	14トレンチ (H14調査)	口縁～肩部3/8 遺存 肩外面に煤付着
	3	土師器 壺	口径: (17.2) 器高: <14.9>	淡黄橙褐色。二次焼成により、ややもろい。石英・長石を多く含む。	外面は口縁部を横ナデ後、胴部を縦ハケ。内面は斜・横ハケ後、ナデ仕上げ。	6トレンチ (H14調査)	口縁～胴部上半 1/5遺存 胴外面に煤付着
	4	土師器 壺	口径: (18.0) 器高: <15.0>	淡黄橙褐色。焼成良好。石英・長石・橙色粒を多く、雲母を少量含む。	外面は胴部を縦ハケ後、口縁部を横ナデ。内面は胴部を斜ハケ後、ナデ仕上げ。	12トレンチ (H14調査)	口縁～胴部上部 1/3遺存 胴外面に煤付着
	5	土師器 壺	底径: 5.7 器高: <12.8>	淡黄橙褐色。焼成良好。石英・長石を多く、雲母を少量含む。	外面は縦ハケナデ。底面も一部ハケナデ。内面はヘラナデ、一部ハケ状となる。	21トレンチ (H19調査)	胴部下半1/2遺存 胴外面に煤付着

南区 西堀 (第8図)	1	越前 壺	胴部破片	淡赤茶褐色。焼成堅緻。長石・石英を多く含む。	内面に輪積み痕あり。	Fk2-2 4a層出土	15C後半～
	2	珠洲 片口鉢	体部破片	灰色。焼成良好。白色針状物を多く含む。	擂目はやや浅く、12条で一単位。	Fk2-3 8層出土	III～IV期 13C後半～14C
2号溝 (第10図)	1	珠洲 片口鉢	底径: (15.2) 器高: <4.2>	灰白色。焼成良好。白色針状物を多く含む。	擂目は浅く、11条で一単位。断面に漆付着。漆織。底部は静止糸切り。	Ik5-2 1層出土	底部1/3遺存 V～VI期 15C
東区 東堀 (第15図)	1	陶器 壺	胴部破片	灰色。焼成良好。白色粒を多く含む。	外面は浅い平行タタキ。	Kg4-5	
	2	珠洲 壺	胴部破片	黄灰白色。焼成良好。白色粒を含む。	外面は平行タタキ。	Kf2-2 3層出土	III～IV期 13C後半～14C
	3	瓦質土器 風炉	口縁部破片	橙色。焼成良好。胎土は緻密。	口縁部に2条の貼付け隆筋と花菱文。	Kf2-3 7層出土	15C
	4	土師質土器 かわらけ	底径: (7.8) 器高: 1.3	橙色。焼成良好。赤色粒を僅かに含む。	底部は回転糸切り。	Kf 2層出土	底部1/8遺存
2号土坑 (第17図)	1	土師質土器 かわらけ	底部破片	橙色。焼成やや軟。赤色粒を僅かに含む。	底部外面に指頭痕あり。	Kj4-1 2層出土	
北区 東堀 (第19図)	1	珠洲 片口鉢	体部破片	青灰色。焼成良好。白色針状物を少量含む。	擂目は深く、9条で一単位。	Ic III層出土	III～IV期 13C後半～14C
	2	土師質土器 かわらけ	口径: (11.0) 器高: <1.4>	淡黄橙褐色。焼成良好。胎土は緻密。	内外面に煤付着。	Ic5-3 III層出土	1/10遺存 灯明里に使用
西区 北堀 (第23図)	1	白磁 碗	口径: (16.2) 器高: <3.9>	素地は灰白色、釉は黄色味を帯びた灰白色。焼成堅緻。胎土は緻密。		Ed2-2 5層出土	口縁～体部1/8 遺存 14C後半
	2	舶載陶器 天目碗	口径: (11.7) 器高: <4.0>	素地は灰白色、釉は黒色で口縁部のみ茶褐色。焼成良好。胎土は緻密。		Ed2-3 8層出土	口縁～体部1/4 遺存 中国産 15C
	3	古瀬戸 卸皿	口縁部破片	素地は淡黄褐色、釉は橙色。焼成良好。赤色粒を僅かに含む。	内外面に施釉。	Ed3-2 1層出土	後II期 14C後葉～15C初
	4	古瀬戸 碗形鉢	口径: (21.2) 器高: <5.3>	素地は灰白色、釉はオリーブ黄色。焼成良好。胎土は緻密。	内外面に灰釉。	Ed3-2 8層出土	口縁～体部1/4 遺存 後II期 14C後葉～15C初
	5	珠洲 片口鉢	底径: (12.6) 器高: <3.4>	灰色。焼成良好。白色粒を多く、白色針状物を僅かに含む。		Ed2-3 5層出土	底部1/8遺存 内面被熱 14C後半～
	6	珠洲 片口鉢	口縁～体部 破片	灰色。焼成良好。白色針状物を多く含む。	擂目はやや深く、13条で一単位。口縁端部に6～7条の波状文。	Ed2-2 1層出土	V期か 15C前半か
	7	珠洲 片口鉢	口縁部破片	暗灰色。焼成堅緻。白色粒を含む。		Ec3-4 1層出土	IV期か 14Cか

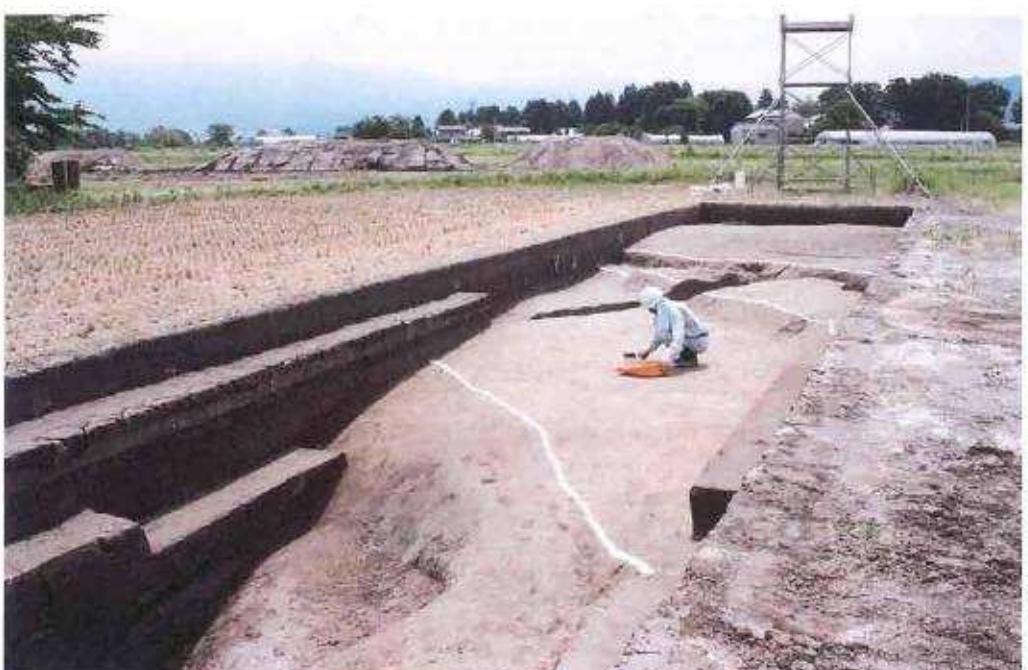
出土地点	番号	種別	計測値(cm)	色調・焼成・胎土	調整・技法の特徴	グリッド	備考
西区 北堀 (第23図)	8	陶器壺	胴部破片	明灰色。焼成堅緻。胎土は緻密。	外面は平行タタキ。	Ec3-3 1層出土	
	9	珠洲壺	胴部破片	青灰色。焼成良好。白色針状物を僅かに含む。	外面は平行タタキ。	Ed3-3 1層出土	V期 15C前半
	10	珠洲壺	胴部破片	灰色。焼成良好。白色粒を多く含む。	外面は平行タタキ。	Ed3-2 1層出土	IV期 14C
	11	土師質土器 かわらけ	底径: (7.0) 器高: <0.6>	黒褐色。焼成良好。胎土は密。	クロコ成形。底部は回転糸切り。内外面黒色処理。	Ed3-3 7層出土	底部1/3遺存
	12	石製品 硯	長さ: <9.0> 幅: 9.9 厚さ: <2.2>	材質: 貝岩(下関赤間石) 重さ: 156.4 g		Ed3-4 7層出土	赤間硯
	13	石製品 茶臼	破片	材質: 安山岩 重さ: 30.6 g		Ed3-3 1層出土	
	14	石製品 茶臼	破片	材質: 安山岩 重さ: 17.3 g		Ed3-4 1層出土	
	1	古瀬戸 平碗	口縁部破片	素地は灰白色、釉はオリーブ黄色。焼成良好。胎土は緻密。	内外面に灰釉。断面に漆付着。漆継。	Eh2-4 2b層出土 (B-B')	後II期 14C後葉～15C初
	2	珠洲 片口鉢	体部破片	灰色。焼成良好。白色針状物を多く含む。	擂目はとても浅い。一単位は7条以上。	Eh2-5 3層出土 (B-B')	V～VI期 15C
	3	珠洲 片口鉢	体部破片	灰色。焼成良好。胎土はやや密。	擂目はやや浅く、11条で一単位。	Ei3-1 2b層出土 (B-B')	III～IV期 13C後半～14C
西区 西堀 (第24図)	4	珠洲壺	底径: (9.3) 器高: <3.2>	灰色。焼成堅緻。白色針状物を多く含む。	底部ヘラナデ。	Eh2-5 3層出土 (B-B')	底部1/4遺存
	5	珠洲 片口鉢	口縁～体部 破片	灰白色。焼成良好。白色粒を僅かに含む。	擂目は深い。一単位は7条以上。	Ei1 1a層出土 (B-B')	V期 15C前半
	6	珠洲壺	胴部破片	青灰色。焼成良好。白色針状物を少量含む。	外面は平行タタキ。	Ei2-1 3層出土 (B-B')	IV～V期 14C～15C前半
	7	珠洲壺	胴部破片	青灰色。焼成良好。白色針状物を多く含む。	外面は平行タタキ。	Eh2-3 1a層出土 (B-B')	V期 15C前半
	8	珠洲壺	胴部破片	灰色。焼成堅緻。白色針状物を少量含む。	外面は平行タタキ。	Eh3-5 2b層出土 (B-B')	IV～V期 14C～15C前半
	9	珠洲壺	胴部破片	青灰色。焼成良好。白色針状物・白色粒を多く含む。	外面は平行タタキ。	Eh3-4 1a層出土 (B-B')	V期 15C前半
	10	珠洲壺	胴部破片	青灰色。焼成良好。白色針状物を多く含む。	外面は平行タタキ。	Ej2-1 1層出土 (A-A')	No.6と同一固体 か IV期 14C
	1	古瀬戸 平碗	口径: (19.4) 器高: <5.3>	素地は灰白色、釉はオリーブ黄色。焼成良好。胎土は緻密。	内外面に灰釉。	Kf III層出土	口縁～体部1/8 遺存 後III期 15C前葉
	2	古瀬戸 平碗	口径: (19.4) 器高: <4.5>	素地は淡黄橙褐色、釉はオリーブ黄色。焼成良好。胎土は緻密。	内外面に灰釉。	Kf III層出土	口縁～体部1/9 遺存 後III期 15C前葉
	3	古瀬戸 碗形鉢	口径: (32.6) 器高: <6.3>	素地は淡黄橙褐色、釉はオリーブ黄色。焼成良好。胎土は緻密。	内外面に灰釉。体部下半は回転ヘラケズリ。	Ec4-3 III層出土	口縁～体部1/9 遺存 後III期 15C前葉
遺構外 ・攪乱 (第26図)	4	古瀬戸 碗形鉢	底径: (10.0) 器高: <1.5>	素地は灰白色、釉はオリーブ黄色。焼成堅緻。胎土は緻密。	底部内外面は無釉。削り出し高台。	Fc III層出土	底部1/4遺存 後IV期古 15C中葉

出土地点	番号	種別	計測値(cm)	色調・焼成・胎土	調整・技法の特徴	グリッド	備考
造構外 ・攪乱 (第26図)	5	古瀬戸 折縁深皿	口径: (29.8) 器高: <5.1>	素地は灰白色。釉はオリーブ黄色。焼成堅緻。胎土は緻密。	内外面に灰釉。	Eg3-1 攪乱出土	口縁部1/8遺存 後III期 15C前葉
	6	古瀬戸 天目碗	口径: (12.8) 器高: <4.4>	素地は灰白色。釉は黒色で口縁端部は茶褐色。焼成良好。胎土は緻密。	体部下半の外面は露胎。	Ed2-3・3-6 Ia層出土	口縁～体部1/8 遺存 後III期 15C前葉
	7	越前 播鉢	口径: (29.2) 器高: <7.4>	橙褐色。焼成良好。白色粒を多く含む。	播目はやや浅く、10条で一単位。	Ed Ia層出土	口縁～体部1/8 遺存 16C前半
	8	青磁 碗	体部破片	素地は灰白色。釉は灰オーブル色。焼成堅緻。胎土は緻密。	体部外面に鏽連弁文。断面に漆付着。漆継。	Jk1-2 III層出土	龍泉窯系 13C後半～14C前半
	9	珠洲 片口鉢	口縁部破片	灰色。焼成良好。白色粒を少量含む。		Kg III層出土	III期末～IV期初 13C末～14C初
	10	陶器 片口鉢	体部破片	灰色。焼成良好。胎土はやや密。	播目は深く、11条で一単位。	Ef Ia層出土	五頭山麓窯 13C
	11	珠洲 片口鉢	体部破片	灰色。焼成良好。白色針状物を少量含む。	播目は細く浅い。一単位は8条以上。	Ed2-5 Ia層出土	
	12	陶器 片口鉢	体部破片	灰色。焼成堅緻。白色針状物を多く含む。	播目はやや深く、14条で一単位。	Ed3-5 Ia層出土	五頭山麓窯 13C
	13	陶器 片口鉢	体部破片	暗灰色。焼成堅緻。白色針状物を少量含む。	播目は深く、11条で一単位。外面に自然釉。	Ek III層出土	五頭山麓窯 13C
	14	珠洲 壺	口縁部破片	灰色。焼成堅緻。白色針状物を多く含む。		Ee Ia層出土	IV期 14C
	15	珠洲 壺	口縁部破片	灰色。焼成良好。白色粒を含む。		Gc III層出土	IV期 14C
	16	珠洲 壺	口縁部破片	灰色。焼成良好。白色針状物を少量含む。	肩部外面に平行タタキ。	Ee III層出土	IV期 14C
	17	珠洲 壺	胴部破片	灰色。焼成堅緻。白色針状物を多く含む。	外面は平行タタキ、内面はナデ。	Ed3-5 Ia層出土	IV期 14C
	18	珠洲 壺	胴部破片	黄灰色。焼成良好。白色粒を含む。	外面は平行タタキ、断面に漆付着。漆継。	Kg III層出土	IV期 14C
(第27図)	19	珠洲 壺	胴部破片	灰色。焼成良好。白色粒を多く、白色針状物を僅かに含む。	外面は平行タタキ。断面に漆付着。漆継。	Ke 攪乱出土	III～IV期 13C後半～14C
	20	珠洲 壺	胴部破片	灰色。焼成良好。白色粒を多く含む。	外面は平行タタキ。内面に漆付着。漆継。	Ic III層出土	IV期 14C
	21	珠洲 壺	胴部破片	灰色。焼成良好。白色粒を含む。	外面は平行タタキ。断面に漆付着。漆継。	Ed, Ee Ia層出土	III～IV期 13C後半～14C
	22	須恵器 壺	頸部破片	灰色。焼成良好。白色粒を多く含む。	内面に円形当具痕。	Ed3-3 北堀1層出土	
	23	須恵器 壺	胴部破片	青灰色。焼成良好。長石を多く含む。	外面は平行タタキ。内面に円形当具痕。	Kh4-4 南堀8層出土	
	24	須恵器 壺	胴部破片	灰色。焼成堅緻。白色粒を多く含む。	外面は平行タタキ。内面に円形当具痕。	Pk2-2 南堀4a層出土	
	25	石製品 砥石	長さ: <4.5> 幅 : 2.5 厚さ: 0.8	材質: 硬灰岩 重さ: 14.6 g	表裏面・左右側面に研磨痕。仕上砥。	Fk III層出土	
	26	石製品 砥石	長さ: <4.6> 幅 : <4.0> 厚さ: <0.5>	材質: 灰岩(鳴滝産) 重さ: 11.5 g	表面・左側面に研磨痕。仕上砥。	Ke 攪乱出土	
	27	石製品 砥石	長さ: <8.7> 幅 : 3.3 厚さ: 2.7	材質: 硬灰岩 重さ: 131.8 g	表裏面・左右側面に研磨痕。中砥。	Fk III層出土	
	28	石製品 砥石	長さ: <7.3> 幅 : 3.3 厚さ: <4.5>	材質: 硬灰岩 重さ: 160.4 g	表面・右側面に研磨痕。中砥。	Fk III層出土	
	29	石製品 砥石	長さ: <6.5> 幅 : 3.4 厚さ: 2.2	材質: 硬灰岩 重さ: 57.8 g	表裏面・左右側面に研磨痕。中砥。	Kf III層出土	

南区 西・南堀と1号溝
(南東から)



南区 南堀 (西から)



南区 南堀の土層断面
(東から)



図版2 東区



東区 全景（北東から）



東区 東堀の土層断面
(南西から)



東区 郭（南東から）



北区 全景（南西から）



北区 郷と東堀（北から）



北区 東堀の土層断面（北から）



西区 全景（北東から）



西区 北堀の土層断面（東から）



西区 西堀の土層断面（B-B'）（南から）

図版4 出土遺物（1）：青磁、白磁、古瀬戸、越前



図8-1



図23-1



図23-2



図23-3



図23-4



図24-1



図26-1



図26-2



図26-3



図26-4



図26-5



図26-6

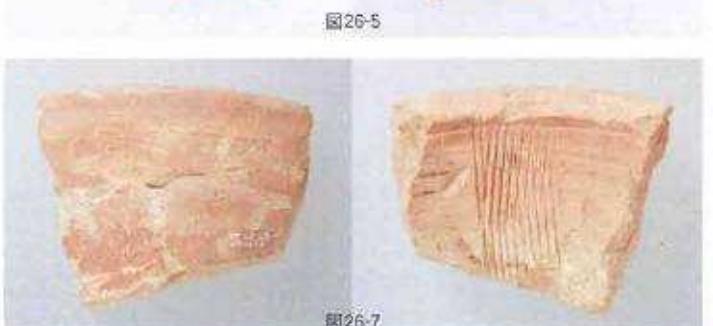


図26-7

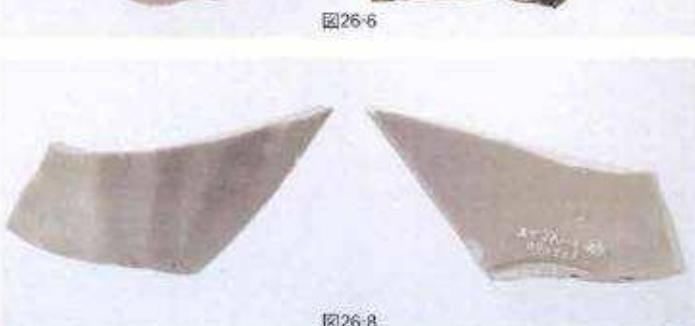
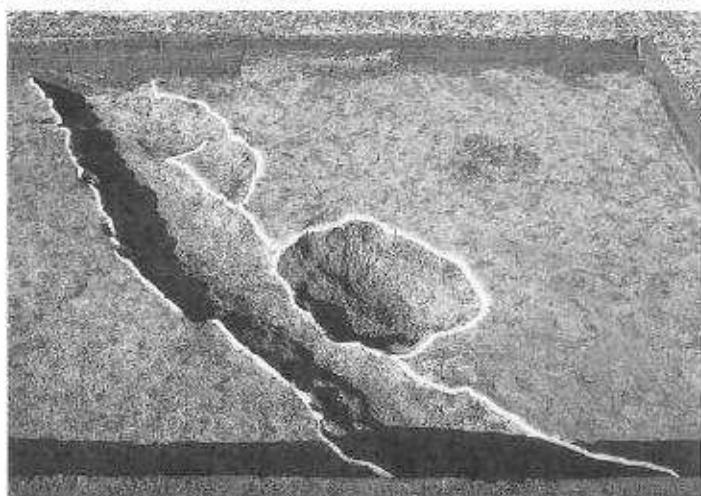


図26-8



南区 西堀（東から）



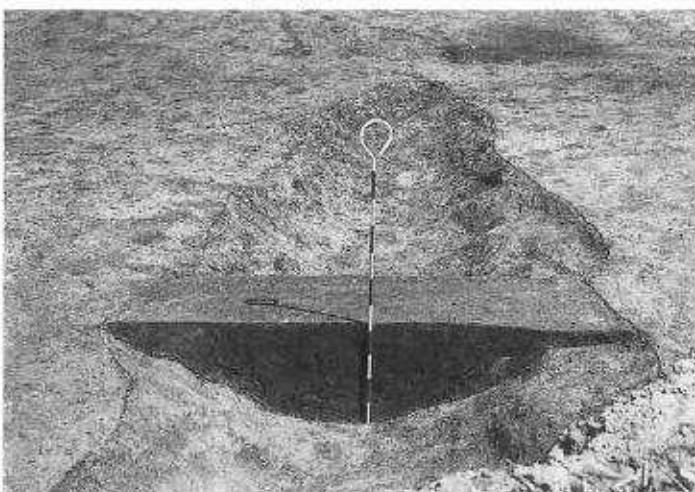
南区 2号溝と1号土坑（南西から）



東区 南堀（東から）



東区 郭（西から）



東区 3号溝の土層断面（南から）



東区 2号土坑の土層断面（南西から）



北区 北堀（南東から）



西区 西堀（Ej・Ekグリッド）（北東から）

図版6 出土遺物（2）：試掘・確認調査、南区、東区、北区、西区

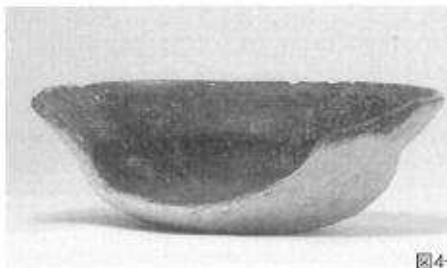


図4-1

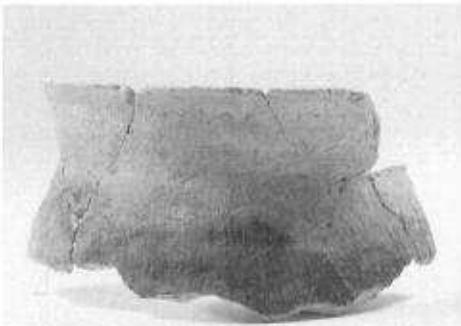


図4-2

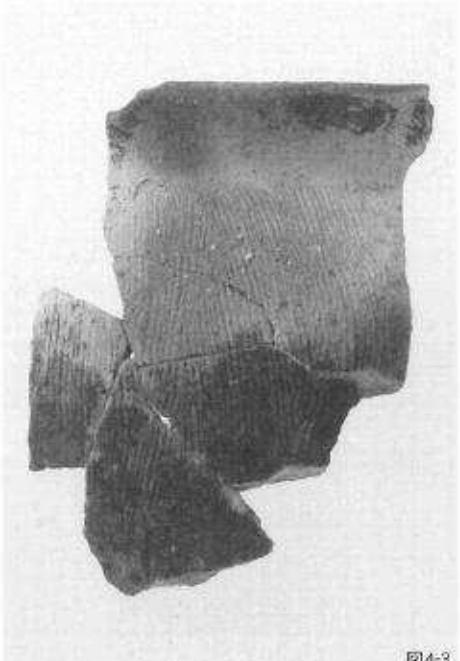


図4-3

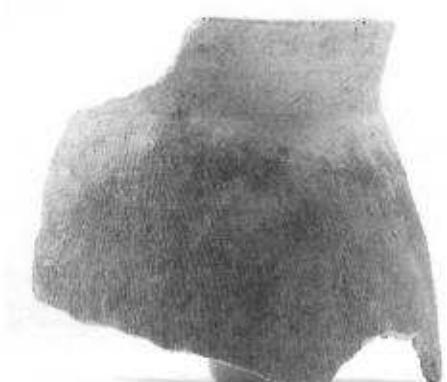


図4-4



図4-5

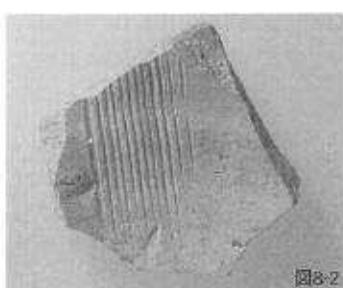


図8-2



図10-1

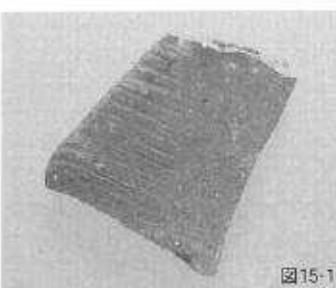


図15-1

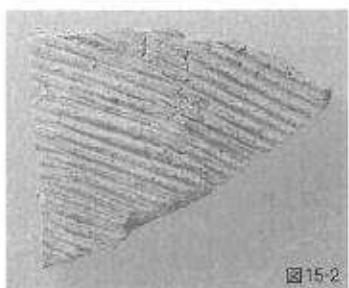


図15-2

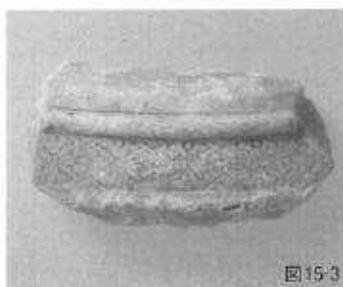


図15-3

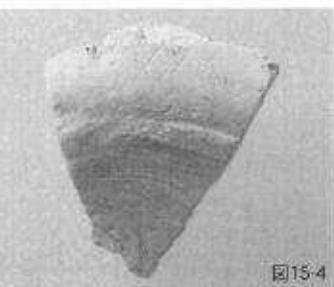


図15-4



図17-1

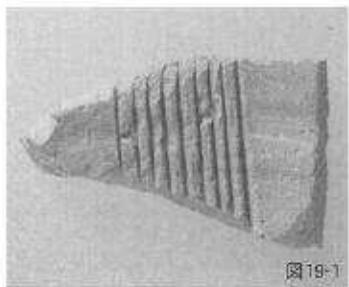


図19-1

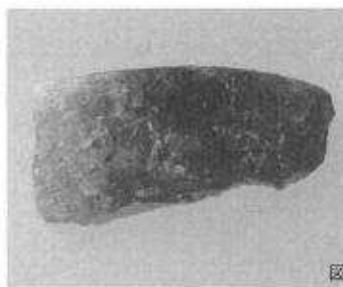


図19-2



図23-5

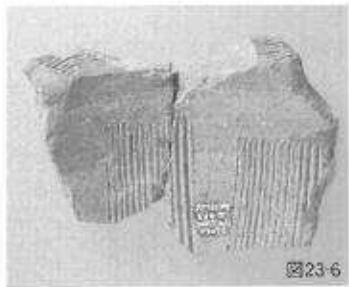


図23-6

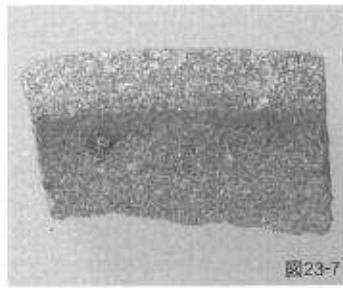


図23-7

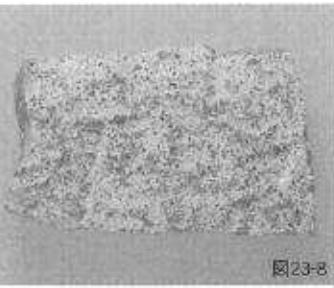


図23-8

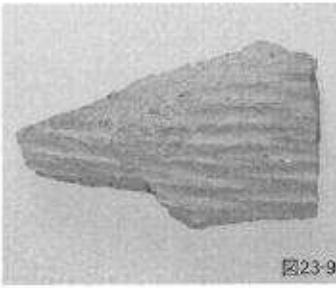


図23-9



図23-11

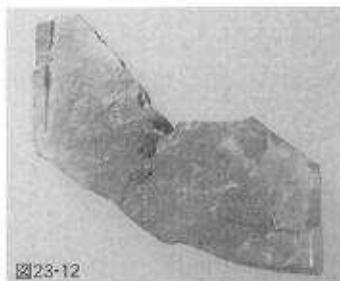


図23-12



図23-13

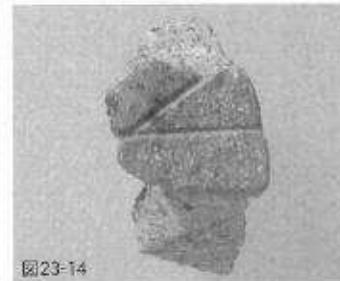


図23-14



図24-2

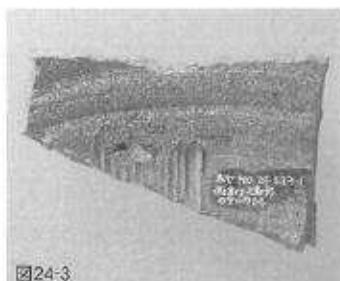


図24-3

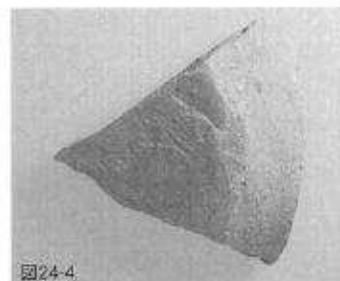


図24-4

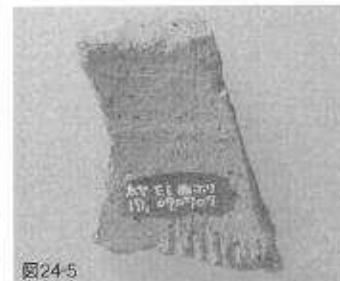


図24-5

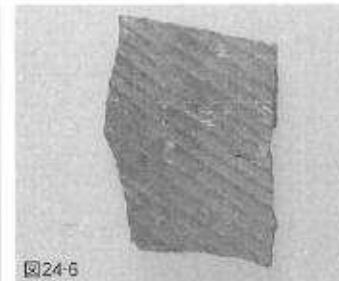


図24-6

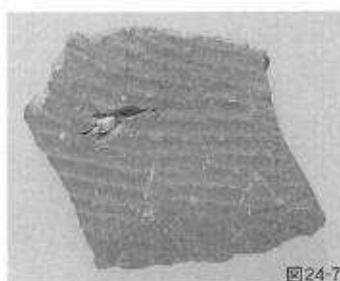


図24-7

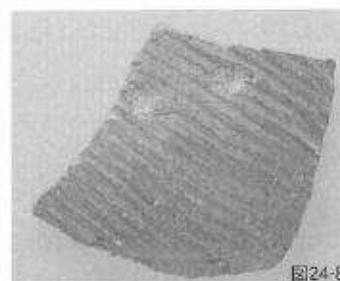


図24-8

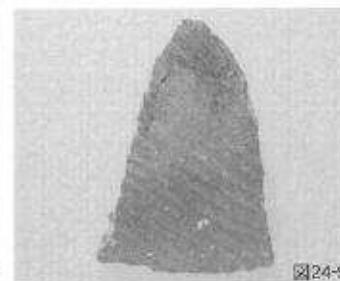


図24-9

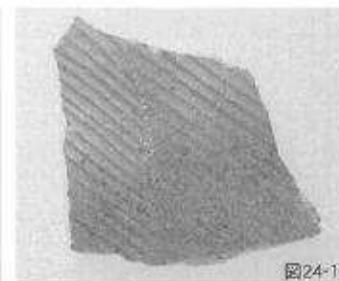


図24-10

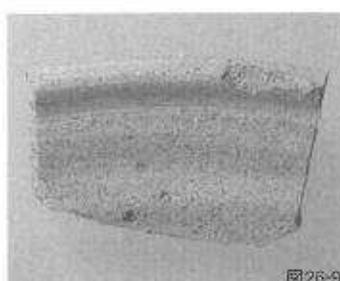


図26-9

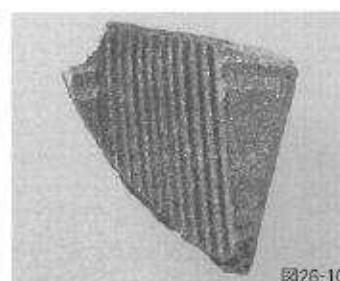


図26-10

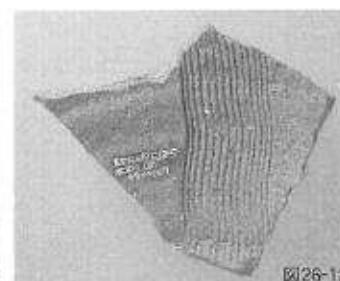


図26-12

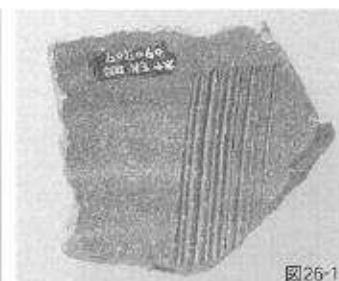


図26-13

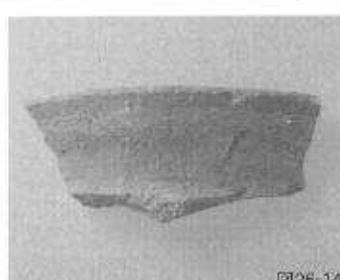


図26-14

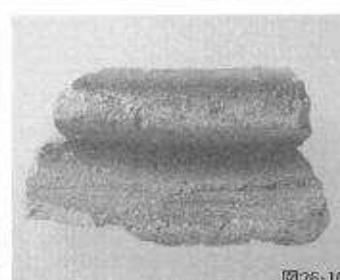


図26-16

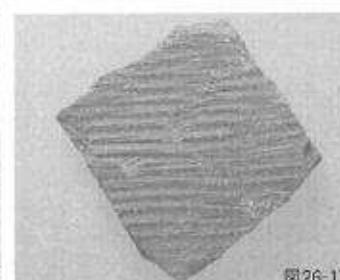


図26-17

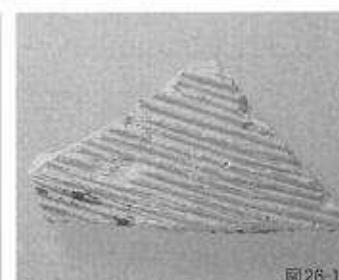


図26-18

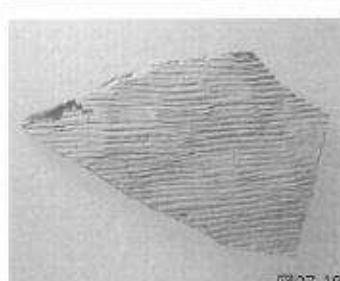


図27-19

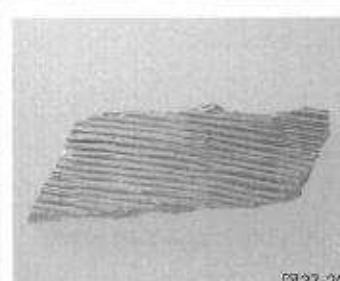


図27-20

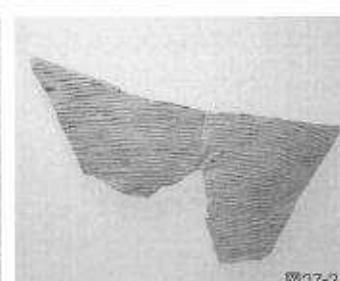


図27-21



図27-25



図27-26

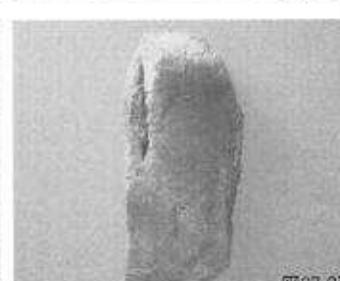


図27-27

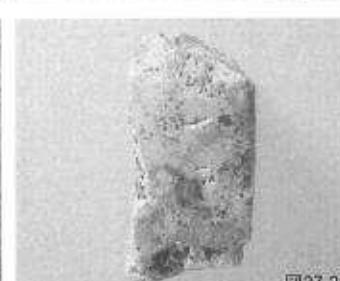


図27-28

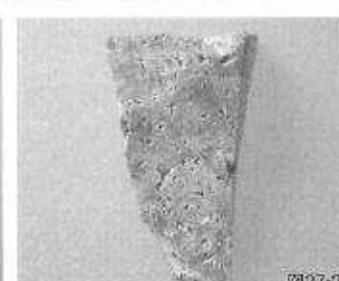


図27-29

報告書抄録

ふりがな	ださいやかたあと							
書名	太斎館跡 発掘調査報告書							
副書名	県営ほ場整備事業(太斎地区)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 I							
シリーズ名	新発田市埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ番号	第41							
編著者名	津田憲司							
編集機関	新発田市教育委員会（教育部 生涯学習課 埋蔵文化財係）							
所在地	〒959-2323 新潟県新発田市乙次281番地2 TEL 0254-22-9534							
発行年月日	平成23(2011)年3月10日							
体裁	A4判 横組1段 本文30頁 写真図版7頁							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
太斎館跡	新発田市太斎字館ノ腰122番地ほか	15206	447	37° 92' 52"	139° 33' 58"	20090525～0724	984m ²	県営ほ場整備事業(太斎地区)
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項	
城館跡	中世 (室町時代)	堀1本 溝3条 土坑2基		中世陶磁器、瓦質土器、 土師質土器、石製品				
要約								
一辺約80mの単郭式方形居館と推定される。今回の調査ではその郭と堀の一部を検出した。郭は地山を削り出して造られているほか、南隅部では盛土をしている。堀は幅10～17m、深さ1.7mで、館の外側からは二段以上に掘り込む。出土遺物から、館は15世紀前半には廃絶したと考えられる。								

太斎館跡 発掘調査報告書

県営ほ場整備事業(太斎地区)に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 I

発行 平成23(2011)年3月10日
新発田市教育委員会
新潟県新発田市乙次281番地2
印刷 株式会社 エンジュ